

# アーロイス・リーグル 民藝・家内作業・問屋制家内工業\*

Alois Riegl, *Volkskunst, Hausfleiß und Hausindustrie*. Berlin [G. Siemens] 1894

河野 眞(訳)

KONO Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: takakons@vega.aichi-u.ac.jp*

目次

I. 家内作業と民藝：両者の本質と相互の関係

II. 奴隷制の興隆と国家形成；経済分野へのその影響；造形藝術の分野における家内作業の陰りと賃仕事の擡頭；いわゆる〈高次藝術〉の擡頭とインターナショナルな藝術流行；民藝とインターナショナルな藝術の関係の観点による一般藝術史のこれまでの経緯の考察；東ヨーロッパにおける家内作業と民藝の延命、及びその原因；延命の事例としてプロヴィナのルーマニア人

III. 現代が民藝に寄せる藝術的関心と経済的関心の因由；〈ナショナル家内工業〉と本来の問屋制家内工業；〈ナショナル家内工業〉によって民藝の諸形態を生きた純粋な実践に保つことの不可能性とその証明；民藝の真正の意味、および厳密に学問的で統一性のある収集と編集の原則を土台としつつ、民藝の生き残りを文献的・グラフィック的に最終的に固定することの真の意義

\* [訳者補記] 本稿では〈家内作業〉との混同を避けるため、„Hausindustrie“を〈問屋制家内工業〉と訳す。

## 序文

色と香りを湛えつつもひっそりと咲く花に、屢々とえられてきたのが民藝である。ロマン主義の青い花は、誰もがそれを知って親しむかの観がある。人を愉悦にさそい陶醉にいざなう源泉でもある。しかしそれにもかかわらず（ここにおいて花と民藝は等しく運命を分かちもつが）、その根までもさぐりあてる大胆な人の手をいまだ経験しなかった。いずこより来たりていずこへ行かんとするのかを究める取り組みを、それは知らない。たしかに民藝には神秘の息吹がただよっている。それゆえ、そこから最善のものをそぎ落とすことを恐れてきたとも言える。無遠慮に手を出して、学問の冷たい光で照らしだし、自然史のシステムという型紙を当てたりなどすれば、と。

しかし冒瀆者として久しい前から存在したであろう、—— 実際、民藝を歴史的に観察し、それによってその本質を的確につかむ鍵を自分のものにする視点に達するのはそれほど難しくないとするれば。では出発点は何処にあるであろう。また推進力は、さらに成長の目標は？ —— とは言え、これらの設問のいかに稀であったことか、況や解答においておや。然らば、わずかに予感に身をあずけるのみ。民藝それ自体に起点を置くことによって、すなわち民藝と共にあることによって、私たちは、人間の美的感覚と藝術衝動（Kunsttatendrang）の出発点に近くある、との予感。民藝を歴史的に把握し、その展開を発生位相において固定することをめぐる困難は、主要には次の点を結果した。すなわち、今日に至るまで、あらゆる高い評価にもかかわらず、また昨今横溢にまで高まった民藝への愛好にもかかわらず、不安な気後れがはたらいて、その本質を問う道からそれてきたのである。ちなみに私たちの一般藝術史とはインターナショナルな藝術発展にほかならないが、それがために民藝はそこに正当な位置を見出すことができない。ちらと目をやる程度でも、まだしも最良の現象なのである。

それだけに今日、民藝（Volkskunst）の呼称でまとめてもよい藝術現象の概念・本質・容量について一度正確に説明する必要があることには、誰も異存はないであろう。民藝について私たちが従来いっていた曖昧で形の定まらない観念に特定の輪郭をあたえて位置づけるとするならば、何よりも先ずその見地を定めて、問題の諸現象を明瞭に見渡し、境界線をくっきりと浮かび上がらせることがもとめられよう。これまでそうした学問的に確かな見地は欠けていたのが実情であり、そのため民藝の境界についてはついぞ一致を見ることを得なかったのである。どこで民藝が終わり、どこでインターナショナルな藝術の王国がはじまるのであろうか？ 私たちにとっては、これが、いずれの場所にあっても喫緊の問いであろう。しかし、共通に妥当し満足よく解答はなされてこなかった。それは、私たちが随所で出逢う現象が示していよう。職人工房の工藝製作が都市のコミュニケーションのなかでなされたのではなかったという理由だけで、ただちに民藝の表出にかぞえられたりして

いる——あきらかにインターナショナルな流行の嗜好によってひろまり、地方村落の労働者にも仲介された形態そのものであるにもかかわらず。

ここにおいて、これまで見過ごされてきた鳥瞰可能な立脚点の視角について指針が得られよう。藝術的に仕立てられた物品が地方村落の労働者によって作られるという事実だけでなく、そこに付随して生産が実行される諸事情もまた、当該の産物が民藝に属しているかどうかの点で考慮されなければならない。そこにあるのはまたもや経済的な契機である。すなわち職人工房による工藝製作であり、すでに見たように、これまた事態を規定すると共に注意を喚起する。そこから見れば、この経済的契機は、民藝の範囲を区切る上で緊急にもとめられる鳥瞰的視点をさだめることに本質的に適している。それは、今日の経済史研究が到達した成果にほかならない。それに徴してその成果を、経済史とかかわる他の種類の諸現象、すなわち藝術分野にももちいることは支障なく許容されるであろうし、またそれによって学術的にも根拠をそなえた確かなものとなる。それゆえ、経済史の成果を民藝（少なくとも造形藝術に関わるものである限りで）の本質と容量の確定に意味をもつとみなすのは正当なことであろう。この小冊子の内容は、大部分かつ主要部分において、その試みにささげられる。

民藝の真正かつ本来のあり方を説得的に明らかにし得るなら、そのときはじめて関連する諸現象にみとめられるはずの意味を様々な側面から十分に意識することになるろう。それは、これまで見当違いの軌道でたずねられていたものでもある。そうして記述が進むにつれて、これまで熱っぽく力説されていた幻影を破壊するチャンスも出てこよう。それだけに欠損もあるろうが、それまた民藝のあり方により接近してはじめて十全の重みと共に視野に入ってくる他の一連のモニュメントによって埋め合わせられよう。それらはまた、対象を私たちの強度の注目に値するものとするだけでなく、そうした注目を必要ともならしめる。実際、民藝の今も延命する名残りの実情となると、民藝の内奥を明かす無上の証左と触れこむだけの産物が製作されるなど問題が多いと言えるだけに、なおさら注意を要しよう。事態が今日そうであるように、民藝がこれから一世代の後には少なくともヨーロッパでは、もはやロマン主義の青い花がかつてそうであったような純粋に神秘的なあり方を保ち得ない恐れが強いことを、よほど真剣に考えておかねばならない。夕闇が迫るとともに私たちの前から姿を消してゆく体の藝術現象がもつ真正の意味あいを深く見つめればみつめるほど、もしこれに関してさらに怠慢をかさねるようなことがあれば、後続の世代に負う責任は大きくなるばかりである。特にオーストリア=ハンガリー帝国では、民藝が興味尽きせぬ諸方向へ延びる様を探求するのも状況はなお比較的良好であるが、だからと言って遅滞はゆるされない。民藝の本質と容量と意味はなおくっきりと認識し得るものの、その生き残りをシステマティックな調査と克明な文献・映像に固定し、それによって自己への責務、すなわち帝国の諸民族（die Völker der Monarchie）への責務ばかりでなく、

学問への責務、さらに人類全体への責務を果たすのに、遅滞はゆるされないのである。緊急かつ垂死を告げる警告が向かうのは、当然ながら先ずはオーストリア=ハンガリー帝国の有関心者、とりわけ開明的な人士である。その人々にオーストリアの教育システムがゆだねられているからである。その方々への仲介は、この小冊子の（民藝の解明と並ぶ）二番目の目的である。正に危険が迫っていると見えるがゆえに、本小冊子の公刊を逡巡することはゆるされないとと思う。

## 第一章

民藝の性状とある種の低次の組織段階にある経済的諸関係のあいだに特定の連関があるはずとは、つとに見通され、その推測は口頭でも文献でも表現されてきたところである。しかしそれとても、多少一般的に指摘する以上には進まなかった。それは民藝と経済的諸関係という二つの面のどちらにおいても、諸概念は十分明らかかつ確かに区切られてはいなかったからである。しかし近年、経済史については、進展に向けて転機がおとずれた。カール・ビューヒアー教授（先にはバーゼルとカールスルーエで教えた後、現在はライプツィヒ大学）という鋭い探究者にして秀逸の学究があらわれたからである。

同教授の包括的な研究と光彩あふれる諸著によって、人間の文物生産の経営形態が階梯を経ることについて、歴史を踏みしめて明確に区分された体系が呈示された。それによれば、最も下位にあるのは家内作業であり、最上位は工場制である。これらの経営形態のうち、民藝を考察するために私たちの立脚点に選ぶべきは、はたしていずれであろうか。人間の藝術製作の発展史のなかで民藝に帰せられるべきものの孰れであるは、発展・成熟度から見ておのずと明らかである。

民藝は、見るからに藝術の発展段階の鎖のなかで最下位に位置するため、そこからおのずと導かれるのは、民藝を判断するにあたっては、経済的な立脚点として先ずは経済的発展の最下位の階梯である家内作業に目を注ぐべきことである。

### 家内作業

語の狭義かつ原初の意味において、文物生産にかかわって、そこでは人間がその生活のために必要とするすべて、また人間とその家族が調達するすべてについて、何一つ交換されることなく、あるいは購入されもしない階梯が家内作業である。しかしそれは、原始人類に思い浮かべられる動物的な状態ではない。空腹を感じたなら手当たり次第に野生動物を殺したり目についた野生の苺を摘み取って飢えを満たし、あるいは眠気にみまわれたり悪天候に襲われたりしたとたん手近な洞穴か木の洞をもとめて安全な休息に身をゆだねる、といった状態ではない。家内作業では、すでに計画的な家政がはじまっていた。動物

は飼いならされ、また仕込まれもし、畑の作物は種が蒔かれ収穫される。

したがって、すでに経済的な生産活動であるが、それは最下位のプリミティブな段階である。そこでは未だ人間社会全体は、多かれ少なかれ、しかし欲求充足については個々の自給自足的な大家族の紐帯に分かれている。必要とするどんな物品も家族の紐帯のなかで用意され、またそこで消費される。個々の家族紐帯のあいだでの物々交換は閉ざされており、交換も購買もなされない。

然らば、かかる絶対的な自給生産のシステムは、そこで生み出される物品の質にいかなる影響を及ぼすであろうか、これを考察したい。製作者がその生産物にいく関心は、考えられる最大級であった。それは自己の使用のためであり、自己自身の欲求を静めることに資する。例えば道具をとってみよう。道具がよいものに作られればつくられるほど、目的に合ったものとなればなるほど、作り手にとって使い勝手が高まり満足も増す。すると仕事も丹念かつ堅実になり、その度合いに合わせて製品も耐久性に富むものとなり、延いては使える期間が長くなり、作り手は同じ道具を新しくこしらえる必要性からそれだけ解放される。

したがって経済発展のこの段階では、人は自己への関心にうながされ、それは必然的に我とわが手による産物を能うかぎり完璧ならしめようとするところへと赴く。もとよりそれは、素材と道具と技術が許す限りにおいてである。言いかえれば、家内作業の道程でつくられる生産物は、徹頭徹尾よい品であれとされる。ひとたび計画的な家政が定着したところでは、人間存在と密接にむすびついた藝術嗜好 (Kunstgeschmack) の情動に表現をあたえることに、人間は早くから到達した。嗜好欲求は人間の根源的な欲求の一つであったことは、ここでも実証的な事実であったと言い得よう。ポリネシア島人に関する多数の証言からは、身体を保護しようとの希求も、身体を飾ろうとする希求ほどにはつよくはないことが明らかになる。野生の人々がどんな被服をも拒否しながら、全身に刺青をほどこす事例も知られている。刺青は装飾の諸形式 (Zierformen) で、そこに色彩による装身 (Schmuck) も加わっている。文化的に低次の諸民族のあいだで今日なおしばしば出逢うものに空白への恐れ (Horror vacui) がある。空白面に耐え得ず、人間の手で藝術的 (人工的) に作りだされたあらゆる平面を文様 (Ornamente) で蔽うのである。それゆえ 家内作業の道程にあって族長制的な家族の紐帯のなかで製作された文物は製作者に特有の装飾欲求と藝術嗜好のスタンプをともなったはずであることは、法則的な確実性をもって示し得よう。これらの文物は製作者の自己使用のためである。またその製作者はみずからの作品の質に強い個人的な関心をもったがゆえに、当然にも、彼は、自製の物品にちなんで装飾欲求を何にもまして満たそうとの志向をいさぐはずである。したがって家内作業の道程で製作された生産物は、徹頭徹尾よきものであるだけでなく、能うかぎり美しいものでもなければならなかった。

自らつくったものに美を表現しようとする人間の志向は、一般的には二つの方向をとった。一つは、自己の作品を、それが藝術的な加工に合うものである限りは、ある種の彫塑形式、すなわちシルエットにおいて好ましい現れ方ならしめる。二つには、その製作物の表面をたいていの場合シンメトリーであらわす図案でおおいつくそうとする（線刻、描出その他）。かくして、一つには藝術的な彫塑形式（plastische Formen）、二つにはいわゆる平面文様（Flachornamente）が成立した。両者を合わせて、藝術形式（Kunstformen）という共通名称でまとめようと思う。

次いで、そうした藝術形式を手がけ、自製作品においてそれを表そうとする個々の家族団（Familienverband）を考えてみたい。実際、ここで言う家族団が手がけるのは、自己の藝術形式に限られる。個々の家族団のあいだには交流はおこなわれない。そのため、プリミティヴな家内作業がおこなわれる場には、新しい形態へと進むような経験を踏まえた重要な動因、すなわち他者との接触は欠けている。家族団の個々のメンバーのなかでの独自の着想がおこなわれる可能性しかない。またそうした着想をうながす外的な刺激もない。往時、人々が暮らしていた諸関係は、語のもつ排他的な意味を含めて、農民の諸関係であった。農民的な諸関係と今日にいたるまでこの上なく密接にむすびついているのは、言い回しにもなっているように、あらゆることならにおける保守性である。旧世界の西を見ても東を見ても分かることだが、どこでも例外なく見出されることならある。土地を耕す村人たちが強烈かつ恒常的にしめすのは、国家・社会・教会・藝術において伝承された慣習と仕組みに依存していることに他ならない。革新に対して、彼らははじめは忌避し、次いで受け入れるにしても、それは緩慢かつ抵抗しつつである。プリミティヴな家内作業の指標である絶対的な無交通がヨーロッパではもはやその痕跡を残していないことは、これまた疑いようがないが、経済的・政治的展開の先史・前史にはそれがあって作用していたと考えられるのも疑念の余地がない。人間社会がたがいに関わりをもたない個々の家族団に分かれ、必要なすべての物品の生産が家内作業の道程においておこなわれていた限りでは、どの分野でも痙攣的な革新などは問題になり得ず、それは藝術の分野でも同様であった。もとより、そうした根本的な持久も、完全な静止状態と同一視するわけにはゆかない。完全な静止状態なら、最初の藝術形式を手がけることにすら行きつけなかったであろう。藝術形式の継続的な発展は、家内作業がもつばら優勢であるところでも起きていたに違いない。ただ、その発展はきわめて緩慢で、いずれにせよ、発展を注視する者すら気づかないほどのテンポであった。家族に固有の藝術形式の要点は、息子が父から受け継ぎ、息子はまた孫へ継ぎ送った。そのいずれの目にも、自分とその属する族団（Sippe）がまもりつたえる藝術形式が完全かつ至美のものとして映っていた。〈新しいデザイン〉に悩むなどは、狂気以外の何ものでもなかったであろう。実際、いかなる競争もなかった。それゆえ、道具にせよ技術にせよ、改良をめざすどんな機縁も欠けていた。先代の人

間にとっての善きもの・美しきものは、後代の人間にとってもそうでなければならなかった。何百年も何千年も、特定の家族団がもつ藝術形式の財物は、本質的な変化を経験しなかったであろう。特定の藝術形式とその構成は慣れ親しまれたものであり、家族団の全員が心底それらになじんでいた。実際、家政のなかで眼差しはいたるところでそれらに触れていた以上、彼らの人生と共にそれらはあったのである。

やがて家族団は、自然な増大のおもむくところ、次第に拡大したと考えてみよう。するとそれは部族へと成長してゆき、遂に非常な多人数と強大な意味へと上昇したであろう。それは近代の術語の意味での〈民〉(Volk)と名づけられるものであった。とは言え、当該の族団が他の別の諸々の族団との接触から免れていたかぎりでは、ここで挙げたような事態の後でも、地理的には拡大した範囲にまたがってはいても、元の家族団に胚胎する全員(すなわち民の同胞 Volksgenossen)に藝術形式の共通性があることは何ら変わらなかった。精々、空間的に離れた諸支族において、少しづつ小さな差異が生まれる程度であった。一つの民の全メンバーに例外なく共通する伝統的な藝術形式のそうした総和が私たちを迎えるところでは、語の狭義かつ本来の意味での民藝を語ることは正当性をもつのである。

その点で、民藝の概念を本源的に構成するのは二つのものである。(1)民藝を作り上げる個々の形式は、特定の社会的階級、たとえば持てる者たちにもみ属すのではないのは、そもそも家内作業のなかには階級分離の余地などまったくないからであるが、そこでそれら個々の形式は<sup>フォルク</sup>民のメンバー全員に共通である。言いかえれば、それらは誰にも知られ、理解され、そして誰によっても実際に手がけられる。(2)一つの民藝が示す諸形態は、伝統という道程のなかで、すなわち持続的で不変の従事のなかで現実のものとなるのでなければならぬ。伝統は、民藝にとって適切かつ不可欠な生命の空気である。

かくして、一つには、家内作業というプリミティヴな経済システムのあり方をたしかめ、二つには、民藝の特徴ある固有性を抑えた。もっとも、後者の民藝は、家内作業システムにあっては支配的な経済の生産関係が人間の装飾衝動によって表面化した成果でもある。この点で、民藝と家内作業とのあいだには密接な因果関係が存在する。ひとたび家内作業という経済的段階へと上りつめると、そこでは必然的に(外部からの暴力的な阻害にみまわれないかぎり)民藝へ至るのである。家内作業が、経済的な物品生産の起点に立つのなら、民藝は、人間の意識的な藝術活動の出発点にある。家内作業と民藝は持ちつ持たれつ<sup>レ</sup>の関係にある。そして両者は相携えて、人間の文化発展のすこぶる意義ある初期階梯にとって本質的な特徴となって発現する。

家内作業と民藝の構成的な相互交替性はどの関係にとっても規定的な重要性をもつ。以下の、国民経済学の観点からの人間の藝術活動の発展の検討においても、常にここに立ち返ることになる。それはまた、この分野の近代の発展の位相をただしく理解する上でも

鍵となる。この基底的な重要性を考慮しつつ、そうした生産関係がかつて存在したこと（これ自体は家内作業の定義として呈示した）をめぐって、現存の証拠を問うてゆかねばならない。

そうした証拠を迫るには、経済史の文献を一つ一つ挙げねばならないところであろうが、幸いなことに、証拠そのものが欠けてはいない。なぜなら、定かならぬ歴史的証拠（たとえば旧約聖書の族長でもよいが）すらままならない場合でも、家内作業そのものの多数の名残りが、今日なお地球上にはほとんどいたるところに見出され、この経済システムがかつて一般的に広まっていたことを十分証してくれるのである。実際、地球上の西洋地域、すなわち近代の工場システムが傲然と支配している地域でも、家内作業の多数の退化痕跡に逢着する。さらに東方、殊にオーストリア=ハンガリー帝国の版図内の各地において、地方の農民のあいだで、家内作業が（先に示した経済的・藝術的な特性をそなえたまま）見出される。後続の章では、これら裨益するところの大きい特徴に富んだ諸事例を検討したい。

## 第二章

家内作業が一般的かつ専らであった時代は、古代の詩人たちが熱っぽく謳った通りの正に黄金時代であった。家族団のなかではすべてのメンバーが等しく位置づけられていた。差異は、わずかに性差と年齢の隔たりが然らしめるだけのものであった。家父長は（母系的な家族団では家母がそれに当たった）たしかに無制限の力を族団の他のメンバーに揮いはしたが、手持ちの物品の享受にあたって優先的であるわけではなかった。そうした社会的関係は、もしすべての人間が生得的な同じ強さを持ち、等しい体力をそなえ、等しい精神能力を宿していたなら、永続し得たであろう。しかし人間のあいだの不均等が、強者と弱者の差異をもたらした。強者が自己の優越を弱者に感得せしめることは、人間の本性に抜きがたく根を張っている。はじめそれは、主要には身体の強さであった。開化が進むにつれて、優越は精神分野において力を発揮した。しかし今日でも、生得的に体力にすぐれた誰かが、その長所を伸ばすことに意をもちい、周囲にそれを知らしめ、周囲をして羨望せしめるとすれば、その振る舞いは本質的に、かの豪力者サムソンが同胞を殴って自己の膂力を周囲に驚嘆せしめたのと何ら変わらない。

かく、血族の自然な感情によってであったか、それとも家父長の権威による押さえつけであったかはともかく、家族団のなかに強者と弱者のあいだで差異が現れた。しかし、より強き者が差異を効果あらしめようと試みても、一過性に終わることが多かったであろう。事情が違ってきたのは、二つの独立した家族団が衝突したときであった。衝突のきっかけは、これまた当然にして必然的であった。つまり、個々の家族団のメンバーの数が増



えたことによって力が増し、その赴くところ空間を伸長させて隣接する土地の境界を越えたりなどすれば、たちまちそれが起きたからである。すると強い方の権利がまかり通った。より強い族団（部族や民族）は弱者に襲いかかって、弱者の土地の全部ないし一部を自分のものとした。弱者が殲滅されれば、人間発展のこれまで通りのシステムに変化は起きなかった。弱い族団が消滅すれば、その場所に強者が入るだけであった。両者のあいだに生じた交流は敵意だけであり、一方の消滅で終わった。そのため交流は、後に影響する結果にはつながらなかった。そうした事例がその後の影響において本質的ではなかったのは、弱い側が逃げおおせて、新しい、それまで無住の地を確保するか、あるいはさらに弱い者たちを追い払ったからである。重大な結果が起きたのは、戦いが、弱者の抹殺に至るのではなく、また弱者がさらに弱い者たちを駆逐するのでもなく、弱者が強者への下屬と依存の関係へと移ったときであった。相対的に強かった族団、またとりわけその家父長は、それによって労働力を得ることになったからである。それらの労働力は、家父長自身ないしはその家族団のメンバーに入ったのではなく、無条件に裁量できるものとなったのである。この新たな労働力に家父長は、自己の家族団に見せるのと同じ配慮をおこなったのではない。自己の優越を示し、強者が弱者に行なう甘美な権利を行使する可能性を得たのである。かくして彼は、より豊かに暮らし、より美しく自己を飾ることができ、しかも自分の直接のメンバーをも自分と同等の家族団のメンバーにも負担をかけなかった。むしろ彼らもまた、家族団の全体が家父長と共に得た余剰のおこぼれに与った。強者にあってはより高い要求が頭をもたげ、弱者にあっては、その拡大された要求を満たすために労働力の提供が起きた。新たに得たよそ者の労働力への支配は無制限であった。家父長はこれらの者たちに、自己の家族団のメンバーに対するのと同じく命令した。しかしそれらのメンバーが家族団の財物の享受にあたっては平等の権利をもっていたのに比べて、服従させられた者たちは違っていた。彼らは、自分たちを打ち負かした強者、すなわち主人の前に奴隸（Sklaven）となったのである。

人間の歴史のなかでそうした事態がはじめて生起せざることを契機は比類なく決定的であった。その契機と共に、もはや純然たる家族連合に立脚するのではない政治的団結が形成されたからである。すなわち国家形成（Staatenbildung）であった。服属者たちに対する家父長の立場は、家族団のメンバーに対する立場とは異なった。家族団のメンバーに対しては、家父長は年長者であることを抛りどころに支配していたが、服属者に対しては強者の権利として支配した。自己の家族団のメンバーに対して彼は当面なお族長であったが、服属したよそ者たちに対しては主人・支配者・王となった。これをもって黄金時代は終わり、奴隸制という青銅の時代が始まった。それだけに、この契機は文化のとてつもない進歩を意味している。ヒューマニストはこれを嘆き、ペシミストはこれを活用してこの世は最悪であることの証しとするかも知れない。しかし国家形成へ至るには、この奴隸制を経

由する道を措いて他にはないのである。すなわち、これまではそれぞれが自立を保っていたが、ここで現われたのは多様で発展をけみした諸個人が交流するに至る道、より高次の要求をしめす位置への道、より高度な事業を着想することへの道、一口に言えば、より高い意味における文化に到達する道である。

やがて、相互に関連し送り伝えられるものとしての人間の歴史が始まる。先陣を切ったのは古代オリエントの国家制度であった。次いで、ギリシアとイタリアの小都市の運命を私たちは耳にする。かれらは、近隣、さらに遠隔の隣人にも支配をいどみ、部分的にそれを獲得した。前面に立って人間の歴史を領導するのは、常に、支配欲をいだき拡大を図る諸民族 (Völker) である。それに並行して、茫漠たる広原に散在して露命をつなぐ諸族もいる。これらについて私たちが知るのは、地中海辺にあつて歴史をつくった諸民族が、これらの諸族と時に敵対の関係に入り、しかもその諸族を善良と見たことがあった限りであった。たとえば、古代を通じて没歴史のヒュペルボイオスの草原に住したスキタイの諸部族について、私たちは何を知っているであろうか。これらの諸部族には、来た日は昨日と等しかった。燃える稲妻、洪水、頭目 (家父長) の死、これらが彼らのたまさかの大事件であり、その生活は純粋に家内作業のなかにあつたが、彼ら自身はそれについて一篇の記録をも遺さなかつた。

これとまったく同じ事態に、私たちは中世においても出逢う。中世は支配欲に燃えた諸民族の凱旋の突進と共に始まるが、ゲルマン系およびラテン系の領主の賦役荘園は経済的に突きつきつめれば、ギリシア人やローマ人の奴隷経済と変わらなかつた。しかしヨーロッパの西部と南部では労働のあり方を奴隷制から解放する動きが緩やかながらも高まりを見せたのに対して、東部は土着のスキタイ的な家内作業と家父長による社会形態にとどまり、西ヨーロッパの国家形成のシステムを取り入れるにしても、まことに緩慢かつ抵抗を伴つてであり、かくてそこにはありとあらゆる混合が入り組んだ。実際、今日にまでその推移は続いている。そのため私たちは、つい最近までなおほとんど族長制的な諸関係のもとに生きてきた諸族がいきなり最新の議会主義に飛び込む特異な場面を目の当たりにすることになった。そうした推移は当然ながら、奇異な諸現象を結果せざるを得ない。

この点にしばしとどまり、ここでの契機の意味を一般的な文化関係の展開とのかかわりで正しく明らかにすることは必要であると思われる。それは、世界史における最初の国家形成だったからである。なぜなら政治的革新が経済的・藝術的諸関係に及ぼした転換をもより容易に理解できるからでもある。高次の政治的展開にとってはもちろん、経済的展開、さらに藝術の展開にとつても、ここではじめて土台が据えられたのだった。さしあたり検討すべきは、国家形成が経済の分野に現れた結果である。

この経済の分野で起きた最も重要な新動向は、何度も挙げたように、奴隷制の成立であった。しかし外面的には、それによって、生産システムはさしあたり変化しなかつた。

新たな労働力を古くからのシステムに適合させるのは自然なことにすぎなかった。自分たちの家族団に奴隷を採り入れたただけだったからである。経済関係が交通の整備によってすでに多大の進展をみていた帝政時代のローマ人のあいだでも、奴隷は、主人の家族に数えられた。したがって古典古代の奴隷経済は、なおも家内作業にあったのである。原材料は主人の地所において手当てされ、加工され、消費された。その加工者は主人の血族ではなく、奴隷ではあったが、家族に密接に属していた。しかしかかる外来の要素を昔からの家族団に受け入れることによって、同時に、家族団のなかで将来起きる分解の芽がやどされた。

家族団のメンバーがみるみる増加するや、複雑化した家族団が純粋な族長制を維持するのは難しくなった。次第に分割に至るのは当然で、私たち近代の小家族ともそう遠くない自立的な単位を含む部分団体が形成されたが、全体として家族団のなかでは自立的な単位がある程度までかたちづくられていた。メンバーの数が非常に大きくなり、遂に民 (Volk) と呼ぶのが無理のないものと見えるまでになる場合には、より小さな団体への分割を前提としなければならない。この分割はプリミティブな大きな家族団を近代の小家族へと導くものであったが、それに向けて決定的な後押しとなったのは奴隷制であった。

ここで、そうした分割された団体のなかでの奴隷の位置を考えておきたい。主人は奴隷の労働力を無制限に意のままにし、彼らを労働させ、その労働は主人の気に入ることが第一義であったろう。しかしやがて団体のなかで、主人の血族の労働をも主人は自由に裁量するようになった。その血族と自分自身のために主人が取りおいたのは、高貴で軽快な労働だけであった。たとえば狩獵である。かくして、一方では主人とその血族とのあいだに差異が生まれ、他方では主人とその奴隷とのあいだの差異ができていった。労働を基礎にした差異であるが、それはプリミティブな家内作業のなかでは起きようのない種類であった。すでにここにおいて、かかる諸関係から階級の差異が形成されるのを見ることになる。すなわち、身分別の区分へという展開である。しかし経済の発展にとってそれ以上に重要なのは、奴隷制の登場によって都市の仕組みの基礎が築かれる条件がつくられたことである。農村経済の労働は、身体存在を維持する上での条件であったが、またそうでありつづけた。家父長がそのメンバーと共に畑を耕さねばならない限りでは、家父長は、農村にとどまることを余儀なくされた。しかし今や家父長はこれまでとは違った可能性をもった。畑労働を彼の奴隷におこなわせ、自分の家屋敷から離れて指図する立場を得て、他の種類の野心を満たし得る可能性である。

したがって奴隷経済の生産システムは、なおも家内作業を基礎にしていた。しかしプリミティブな経済システムから進歩したこの階梯において、労働はみるからに分解した。古くは、労働は血縁関係に依拠していたので、団体と密接に結びついていた。労働を前にすればすべての者が平等であった。そこに変化が起きた。労働は質によって分割され、専門

化の度合いが強まった。次の展開への道筋があきらかに先取りされていることになるが、労働が大家族から切り離される趨勢はいよいよ決定的となってきた。この過程が最終的に完成されるのが賃仕事（Lohnwerk）で、経済発展の第二の大きな階梯である。

家内作業から賃仕事への移行は、多種多様な個別事情にも即応しつつ、此処かしこでそれぞれ異なった仕方ではあれ実現を見るに至った。なかでも完全な記録が存するのは、ローマの法制史の分野であり、そこから得られる推移はここで典型として取り上げてよい。私たちが政治史から知ることになるのは、ローマという世界帝国の域内では共和制時代末期に奴隷経済が巨大な規模に達したことである。奴隷は生きた人力として高価な所有物であり、できるだけ高額で販売することが目指された。とは言え、特定の家政のなかではそれほど多数の奴隷を使う必要がない場合も現れた。そうした狭い家政のなかで余った奴隷は、特定の熟練を得させて、ちょうどそれを持ち合わせない他の家政に労賃を代償として提供された。かくして奴隷はそれを欲していた他の家族にいわば臨時的に移り、そこで原材料ならびに仕事に要する道具を手にした。そして労働が終了すると、ふたたび元の主人のもとへ帰り、その労働に支払われた賃金は主人のものとなった。ここで見られるのは基本的には家内作業である。物品を消費しようとする者が原材料も道具も提供し、その畑や地所が物品の作成される場所となる。労働だけが外部から来るのである。労働は、物品を作成・提供される先の家族に属しはしないが、労働はなお自由ではない。奴隷は、他者すなわち消費者のものではないにもかかわらず、なお奴隷である。そして最後の一步となるのは労働の完全な解放であるが、それがローマ帝国の枠内で実現するにはそれ相応の道筋をたどった。奴隷には、その才覚をより高い業務に合わせるようにし、それによって主人に有利な金儲けの能力をそなえるようになれば、その労働によって外で稼ぐ賃金を受け取る主人から少額が奴隷自身にあたえられるようになった。その奴隷が利発で貯金にも長けておれば、次第に蓄えを増やして自己の解放を購うようになる。そこで彼は解放された者となり、その立場でその習熟した仕事を続ける。それまではかつての主人の委託でおこなっていた仕事を、今度は自分の意思で、またフル賃金で行なうまでになると、彼は完全な自由を得たことになる。そこにおいて人間が自由になると同時に労働も自由となったのだった。経済史のこの階梯をカール・ビューヒャー教授は賃仕事（Lohnwerk）と呼んだ。それは職人の直接の前段階である。職人にとっては、労働だけでなく、道具も原材料も消費者である家族からは切り離されているからである。

家内作業から賃仕事への移行過程はローマ時代にはじめて実現したのではなかった。すでにホメロスにおいても、多くの職種が賃仕事の組織をもっていたことが判明している。その最初は、さらに古代オリエントのチグリス・ユーフラテス両川文化にまで遡るであろう。逆に、ローマの法治国家で起きたのと酷似した推移は、中世全体を通じても跡づけることができる。自由がなく、言いつけられるだけの労働も、次第に規模の大きな賦役

荘園や僧院を手はじめに解放が進み、やがて都市において賃仕事がよく確立した。それはさらに、工房手職として定着した。

私たちが関係する地域の西方では、賃仕事も家内作業も名残りとしては散在しているが、原初の純粹なありかたは稀である。それに対して東部では、家内作業と並んで、賃仕事は頻繁におこなわれている。たとえばガリチアでは、ルテニアの農民たちが絨毯を、自ら大麻を育て、羊を飼育し、撚糸を用意して紡ぎをおこない、さらに自ら染める。そして織り仕事だけは、それを請け負っている織り職人に委ねる。しかしヨーロッパ西方の賃仕事との違いは強調しておかなければならない。ヨーロッパ東部では、この賃仕事はゲルマンやロマンス語の諸地方におけるように奴隷制の仕組みを経由したのではなく、プリミティヴな家内作業から直接的に成立したのだった。その移行は、西方とその経済的諸関係に少しずつ接触するうちに、すなわち近代の交通の便宜によって招き入れられたのである。古い家族団は緩むか解消するかした。そして徐々に、ある種の産業の企画にとっては労働力の不足がはじまり、そこで賃仕事人を借りることが余儀なくされた。しかし近年、経済的な仕組みの転換はヨーロッパ東部において部分的には急激なテンポをとった。そのため、家内作業が止むにあたっては、賃仕事の階梯をとばして、いきなり工房手職(Handwerk)の段階に突き入ることも少なくなかった。発展がそうした推移を見せたのは、特に南スラヴの諸方であった。そこでは多くの証言によると、ほんの数十年前まで、農民のあいだでは家内作業の経済システムがもっぱらであり、そこに賃仕事が混じっているという状態であった。今日その場所で、昔の手仕事の大部分が忘れられ、飛ぶような速度で工場システムへの移行が進行している。したがって、ここでもまたもや、政治的展開と経済的展開のあいだの密接な並行関係がみつめられる。一方では族長制下の町村体から議会主義への飛躍があり、他方ではプリミティヴな家内作業から近代的な工場システムへの跳躍である。一方が他方を条件づけるが、それは国家形成のとき以来、人間のあいだで常に生起する事態でもあった。

ここで検討を要することがらがある。奴隷制と賃仕事の擡頭というここで描いた過程が民藝の領域にいかなる結果をもたらしたかである。この点でも、やはり政治的と経済の二つの領域のあいだの密接な並行関係が決定的なものとなるであろう。

自立的な家族団による家内作業の内側では、すでに見たように、我とわが消費のための物品を能うかぎりよきもの・美しきものに仕立てることが必然的に追及された。そうした志向の根拠は、作り手が、自ら使用あるいは消費すべき物品には最大の個人的関心を寄せることにある。奴隷が導入されたとき、この絶対的な自己関心の大部分が失われた。それは、特定の家族団に必要な物品を製作するためであった。奴隷は家族団に受け入れられ、その喜怒哀楽を分かち、それゆえ自分が製作した物品についてある程度は消費者でもあった。しかし奴隷の労働の獅子の分け前は主人とその血族に帰した。それゆえ、生産を

できる限りよきものに仕上げようとの自己関心に根差した急迫は、必然的に奴隷には抜けおちた。奴隷をして、主人の関心に合わせて物品を手がけることへ促したのは、畢竟、強制、すなわち主人の拳骨であった。

奴隷の幾分かは、賃仕事人という面がある程度つよかったと言ってもよかった。奴隷が、少なくとも部分的には自ら作った物品の消費を共にする存在であったの対して、賃仕事人にはその限定的な関心も抜けおちる。賃仕事人は、自らこしらえる物品を享受に加わることは決してない。賃仕事人が賃金と引き換えに担当する労働が良好に進められるなら、賃仕事人をそこへ導くのは（奴隷の場合それは強制であったが）ビジネス関心（Geschäftsinteresse）である。このビジネス関心は、その推進力の強さにおいて、プリミティヴな家内作業のなかでの自己関心にはとうてい及ばない。後者の自己関心が絶対的であるのに対して、ビジネス関心は幾重にも条件づけられている。それは、一つには、労働と引き換えにもとめられる賃金を尺度にして計量された。すなわち、より多く支払う者は、賃金を呈示された賃仕事人からよりよき働きを受け取るのは当然のことである。二つには、それは需要に応えるものでもある。需要が強ければ、賃仕事人による仕上がりがあちこちから急<sup>せ</sup>かさされ、そのため顧客に向ける技能は価値が低くなったが、それにもかかわらず仕事を立派に果たしたと思ひこむのだった。

したがって物品は、一口に言えば、特色ある物品ではなくなった。それは、家内作業の第二の階梯たる奴隷制であれ、賃仕事人へと至る過程で作られるものであれ、同様であった。そこでは能うかぎり美しくという作り方も、もはやプリミティヴな家内作業におけるようなものではなくなった。美しくという特質も、これ以後、物品の特質そのもののような絶対的なものではなくなった。所産（たとえば道具）は、家政のなかで役立てられるとなると、使用において堅牢でなければならなかった。他方、それへの加飾は、対象が使用できるものであることにおいて欠くべからざるものではなかった。そこから、奴隷経済に入ったことをもって、奴隷によって作られた物品への作り手の絶対的な自己関心をめぐっては、その物品をできる限り美しく形づくる志向は欠落した。

しかしこれは、民藝の次の形成にとっては、経済関係の変化がもたらした結果ではなお最も重要なものではなかった。なぜなら奴隷もまた、その生得かつ、そのはじめに属していた家族団で従事していた藝術嗜好をまったく断念することはできないからである。それに比べて、民藝のその後の運命にとってさらに重要なのは、これまで無縁であった二つの民藝グループがぶつかったことであった。ともあれほとんどの場合、勝者と敗者は、その衝突の直前まで、それぞれ独自の藝術形式をもっていた。となると特に予期されることでもあろうが、強者は打倒された者に対して、（肉体的にまさった者が精神的・藝術的にも優越であるところでは）自己の独自の藝術形式をまねることを課した。しかし関係が逆の場合があることは歴史の経験があざやかに教えるところであり、肉体的に負かされた側

が、その藝術法則を勝者に教えることもあった。しかし両例とも、衝突する両者が共にまだ家内作業の階梯にある場合には、めったに起きなかった。むしろ通常は、彼我の力は相並び、藝術発展の高さもほぼ等しかった。そもそも民藝は、ささやかなデコレーションの段階を超え出ることにはできないからである。そこで特定の藝術嗜好が力づくで死に絶えるにはいたらないとすれば、奴隷は強制に従って主人の藝術形式を受納したとしても、一般的には、その製作を進めるにあたっては彼自身が受け継いでいた藝術志向の影響も受けたとしか考えられない。かかる外部の影響は、ある点では強烈に、他の点では目立たないまま着手・実現されたかもしれない。いずれにせよ、それは伝統に穴があくことを意味した。そもそも、前進と言っても、ほとんど動きのない静止状態にあつて自己自身の轍を變哲もなくひたすら歩むのが、あらゆる民藝の本質的な特徴であることを先に示したが、そこに強烈な攪乱が生じた。先に (p. 89) 伝統こそ民藝を養う空気であると記したが、その伝統が止んだ場所でインターナショナルな流行がはじまった。その過程では、奴隷制の登場が民藝の中断・解消にしだいに強制力を発揮したであろう。

奴隷経済を通じて民藝の継続が葬り去られたのには、第二の側面も関係した。先に民藝を定義したさい、定義の後半部のかたちで述べたのは、民藝の諸形式が民<sup>folk</sup>のすべてのメンバーに親しまれ、彼らによって実行されていたと考えられることであつた。それゆえ、プリミティブな家内作業にあつては階級の差異は生じようがないことも強調した。しかし事実として、奴隷制の仕組みがその差異の導入を結果した。主人は、強者の権利を藝術形式にも行使した。美とは、強さの現象形態そのものではなかつたか。豊かな装飾は、貧弱な装いにある種の優勢をもって対置される。虚栄や政治的関心が主人をして装飾をつけることへと走らせる。奴隷はそれを作りはするが、自らまとうことはゆるぎされない。かくして個別の藝術形式は、個別の階級にもっぱら優先的な特質となつた。また個別の階級はこれまたその藝術形式を自らの用途以外にさかんに製作させて、さらに次第に選別をも加えるようになった。したがつてこの面からも、遂に民藝に穴があげられ、さらにその穴は商業的な連絡が始まってからは途方もなく拡大したであろう。

奴隷制の仕組みは、外面の経済的組織では家内作業に固定しているように見えたが、民藝の現存にとっては詰まるところ破壊的であるほかなかつた。そうであれば、これが威力を発揮したのは、賃仕事が爆発的に入りこんだ場所においてであつた。賃仕事人はたしかに自由であり、そのため主人が奴隷に行使したのではない。言い換えれば奴隷には本来無縁であつた主人に独自の藝術形式を引き受けさせられる強制の下にはなかつた。それにもかかわらず、仕事を与える者は、今は自由となつた労働者すなわち賃仕事人に、ささやかな影響を及ぼしただけでなく、むしろかつて主人が奴隷にあたえたよりも大きな影響を発揮した。なぜなら、奴隷は、生産物が高次の物品か低次の物品か、美しいかそうでないかはともかく、主人から生活の資を供与されていたからである。この点で賃仕事人は契約に

よって仕事にみちびかれたのだった。しかし仕事を得るには、何よりも先ず顧客の希望に  
応えねばならなかった。顧客の希望が藝術的な脈絡をも含めて満たされれば満たされるほ  
ど、その顧客の仕事に継続してかかわることが確かになり、より高い賃金を期待できるよ  
うになる。通常、彼が能力と技能を呈示するにあたっては、彼ただ一人しかいないわけ  
ではなかったであろう。競合者があり、顧客にこの上なく満足させる姿勢を見せていたと考  
えなければならぬ。かくして、賃仕事の下で、これまた人間が同質ではない結果とし  
て、当然にも競合が起きる。すなわち競争が生まれたのである<sup>(原注)</sup>。人々は技能において  
互いに他をしのごうとし、着想に走り、より目的に合う道具を考え出し、より楽で時間を  
節約できる技術を磨き、新たなデザインを案出した。そしてこれらすべては、伝統を打ち  
破る強力なテコとなった。かくして賃仕事は、遅かれ早かれ民藝に止めをさすことになっ  
た。民藝が工房手職(職人工房)の段階にまで影響を及ぼし得たのは、二三の僥倖な分枝  
においてだけであった。

かくして、プリミティヴな族長制による家族団の解消は、国家形成の赴くところとも重  
ななって、奴隷経済と賃仕事がプリミティヴな家内作業にとって代わった。そして賃仕事  
が、これまた民藝の壊滅を結果した。先に見たように、政治・経済の分野におけるプリミ  
ティヴな状態の除去は、どうであれ両分野でのより高次の組織への拍車であった。とする  
と、そのアナロジーは民藝についても言い得よう。死滅しつつある民藝は、藝術製作のよ  
り高次の段階への温床となった。民藝の長所に眼をつぶる必要はない。その作りがもし  
だすナイーヴな落ち着きと不壊の確かさ、その生産物の清潔と無欲な愛想、良俗や宗教が  
民藝の形式と細やかに結びつく様、延いては民藝の存続を見まもる部族(Volksstamm)の  
生活全般と民藝の形式が重なる様子、これらには讃嘆の喝采と理解のこもった称賛が寄せ  
られよう。しかしまた、率直であれば、見紛いようもなく分かってこよう。人間の藝術製  
作はこの段階に永遠にとどまり得るものではなかったのである。またこの段階を後にする  
ことは、否定すべくもなく掻き消しようもない長所の放棄であるだけでなく、他面では藝術  
発展の本質的・決定的な前進をも、したがって同時に人間の文化発展一般の本質的・決  
定的な前進をも意味している。

もし民藝に永遠にとどまっていたなら、記念碑的な建築・彫刻・絵画の開花にはいたら  
なかったであろう。伐り出したままの樹木を組み合わせて丸太小屋をこしらえるのは、プ  
リミティヴな家内作業が支配的であるところでは、誰にでもできた。建築藝術はこの段階  
ではまだ真実の民藝であった。しかしゴシックの教会堂のようなモニュメントの殿堂を恒

---

(原注) 競争は、奴隷がそれまで無縁であった家政に組み込まれたときに(p. 94)、すでに始まっていた。主人は、〔訳者補記〕他者の家政に貸し出して得た)賃金のなかから僅かではあれ、奴隷に与えて、奴隷の職能の向上を図った。



久の素材で作り上げるには、手当たり次第ではゆかず、建築家を必要とした。そして建築家を志す者は、他の人が必要としない膨大な知識を習得せねばならなかった。そしていったん彼が職業として一人前の建築家たることをこなすようになるや、彼には建築家としてすべてが要求され、同時に畑を耕したり、家畜を追ったりなどはできなかった。ところで、建築家にモニュメントを構築する営為を託したのは誰だったろう。族長的な家父長ではなく、まったく別であったろう。また（血縁のゆえとは限定されずに指図にしたがう）労働力を自在に使いこなしたのは、強力で（生得的ではなく）後得的な独自意思であった。さらに主なる神のために神殿の設立へと向かった直接の刺激は、しばしば戦争や勝利であった。戦争に向けて、また勝利を授けた給うた神のために謝碑を建立することに熱が入ったのである。ここから見てとれるのは、建築家という存在は、人間社会の脈絡と生存様式に生じた一連の変化を前提にしていることであり、またその変化はプリミティブな家内作業の時代から起きていた動きの満了であったはずということである。同じことは、当然ながら、爾余の造形藝術にも言い得よう。小刀の握りを一種のシンメトリーの形に刻むことは、家内作業の時代には誰もがなし得たかも知れない。しかし神の姿を理想的・精神的、しかも人間の姿で削り出すには彫刻家が必要であった。同様の懸隔は、粘土をもちいて丸太小屋の壁を明るく眼をたのしませる色合いに塗りこめるその家の娘と、歴史的なフレスコ画を描く画家とのあいだにも存する。

したがって、民藝にとどまっていたは、高次のモニュメントとなるような藝術の開花にはついぞ行き着かなかったであろう。しかし、原初の自立的な家族団の完結性が一点においてなりとも破られるや、言い換えれば異物がよそ者と共に寄りきて接触が後に尾を引くなら、その後に続く過程を招いたことになり、必然的にサイクルは拡大しつづけよう。実際、それは民藝を次々と破壊し、あるいは同化して、いよいよ高次の仕組みへと連れ行かずにはおかなかった。しかし、接触し重なりあったことにより、民藝の階梯そのものを超える出る進行をうながすことになる最初の衝突を起こした二つの民藝には、その後の発展過程にとって特別の意味をみとめなければならない。二者は、相互交流的な影響と浸透のなかではじめてこれまでより完全な物を出来させたのであった。そして、これまでより完全なそれは、続く時間経過のなかで、より小さく、なお民藝の性格を帯びたものとぶつかり、これまた相互交流による豊穰化のなかで、共通の新規なものを生み出した。そこでは、その生産物のなかでは、より完全な部分が、強きものとして、より規準的で貫通力にまざった構成素となるほかなかった。

ここで述べたことがらを説明し、かつ確かめるために、藝術史のこれまでの流れを、それが厳然たる輪郭において私たちの目前にある限りで、手短かくなぞっておきたい。本格的な藝術史は、作りもののモニュメント的にして永続性をめざす藝術活動とともに姿をあらわすが、その起点に立つのはエジプト古王国の遺した諸作品である。地球上の他のすべ

ての諸民族 (Völker) が、私たち回顧者の眼にはなお不透明な闇のなかにひろがっていた時期に、古エジプト人は、不壊の素材からピラミッドを築き、神々と諸王の象を彫出し、その墓所の壁面に、対象把握の内容を盛りこみ葬送を目的とする線画を描いた。並行して、これら藝術作品の建設において私たちが出逢うのは、人々の諸身分への区分化であり、また際立った都市の形成である。ここにおいてナイル河谷の最古の文化的人間集団は、豊穰を約束する温もりを諸方に放った。とりわけ東方に向けてである。この接触過程の推移の個別事情については、私たちは十分な知識をもたず、より深い説明ももはやほとんど期待し得ない。と共に、いかなる段階を踏んで、また幾つの段階を踏んで、古王国のエジプト人がプリミティブな家内作業から離れたのかについても、何ら確定することができない。しかし記念碑的な遺作から明らかになる一事がある。エジプト藝術に固くかつ特有の諸形式が、見紛いようもなく、西アジアの最古の諸芸術にあらわれるのである。メソポタミアとフェニキアにおいてロータス文様とパルメット文様が規準的な装飾モチーフとなっているのに出逢うのは決して偶然ではない。エジプトのモニュメンタ的な藝術とメソポタミアの民藝との原初の衝突にあつては、前者が強者であり、当然ながらその形式を後者に押し付けた。しかしそれはただの奴隸的な受容ではなかった。無縁の物と無縁の物とが新規なものを生み出す法則にしたがい、エジプトの見本がメソポタミアとフェニキアで模倣されると、それは前進につながった。ここで挙げたアジアの藝術において、私たちは、エジプト人とは異なつた藝術上の進歩という事実に出逢うのである。同様に、古代ペルシア帝国に至るまで、西アジアに消長を重ねつつ、政治的支配へ進み、またそれによってより高次の文化的開花に到達した全ての民族は、間接的か直截的かはともかく、エジプト人の規準的な影響を経験した。

自然ななりゆきとして、個々の人間にとつても個々の民族にとつても、造物能力 (Erschaffungsfähigkeit) の限界がある。エジプト人の場合、起源とは言わないまでも、藝術の進展のなかで造物性が次第にたかまつた付随的な事情は明らかにみてとれる。この民族 (Volk) にとって、時が経つに連れて、他の諸民族と実りゆたかな触れあいと結びつきをもつ能力は失われていった。そして自己のなかに閉じこもり、新鮮な若やぎの水を常にもたらすことになるかも知れぬ運河を自ら遮断した。その間に他の諸民族 (Völker) は、エジプト人から受容したものを携えて発展した。古代オリエントの諸々の世界国家のなかで、それはすでに起きていた。アッシリア人による都市形成と歴史的浮き彫り、あるいはフェニキア人の貿易・商業活動は、当時の西アジアが家内作業と民藝を脱していた有力な証左であろう。しかしこの方向への最大かつ最も決定的な歩みは、ギリシア人という活発な民族であつた。

世界史の年代記への正確な接続が少なくとも今日のところはなお欠けている時代に、後のヘラスの住民たちはすでに、高次の藝術創造への特別の使命について明瞭なドキュメン

トをのこした。その証拠は、いわゆるミュケーナイ藝術という遺産のなかにある。これを特に教えることの多いものとすると共に、同時に判断と理解をとてつもなく難しくしている事情がある。従来たがいに無縁であった二種類の藝術のあり方が明らかに衝突したことである。一方はエジプトの文化であり、他方は紛れもなく土着と見られる文化である。しかし後者もすでに民藝ではなくなっていたように思われる。後者には、藝術的組織と長期的影響の意味において、エジプト人を含む古代オリエント人を衰退へ導いた全てを超越する諸要素が含まれている。洗練されたギリシア藝術に典型的かつその全てに支配的な文様、すなわち唐草文様が、すでにミュケーナイ藝術には前段などではなく、すでに熟したのものとして表されていた。それに対して、古代オリエント人はその方向への姿勢にもかわらず、完成への決定的な歩みには踏み出さなかった。〈ミュケーナイ〉民族 (Volk) の外見的には自給自足的な藝術財がいかなる源泉が流れあつまって形成されたのかは、推測して語ることにすらし得ない。ただ一つあきらかなのは、ギリシアの土地を舞台にしたその後の展開は、価値の低い幾つかはさておき、ミュケーナイの文様、とりわけ植物からみた文様 (Pflanzenranke) を決して放棄しなかったことである。それと並んで、ギリシア人は、彼らのオリエント文化の前任者の造物営為をまことに有益かつ美的考量の限界まで活用した。かくして、ギリシア人の手の下、藝術形式のモチーフという財物がかたちづくられた。それは、発展段階の高度の位置にあって、これまで藝術を領導した諸民族が成し遂げたもので存在するすべてを凌駕した。やがてオリエント藝術も、ギリシア藝術に対しては遅れをとることを感じとった。まずはペルシア藝術がギリシアの諸形式に幅広く門戸を開いた。ギリシアの諸形式はオリエント全域を征服していたのであり、その軌道上に、アレクサンダー大王の軍隊が勝利した後、アッティカ芸術がオフィシャルにも、それまで世界文化の中心であった西アジア諸所に浸透したのだった。

世界帝国は、偉大なマケドニア人がそれを志したが、最終的に成功させたのはローマ人であった。世界帝国はもちろん限られた意味においてであるが、少なくともそれが意味するのは、地中海を囲むすべての民族、したがってナイル河谷から発して放射状に地中海世界に広まった文化に属する全ての民族が一つの王笏の下にまとまったことであった。ローマの世界支配と並行して、ローマの普遍文化 (Universalkultur 統一文化) もまた、古代のほとんど全ての文化地域をとらえることになった。普遍文化は見たところ民藝の徹底した対極である。それは世界国家が自律的な家族団の徹底した対極であるのと同じである。事実として、普遍文化も世界国家も、元素的なものの上昇であった。すなわち単純なものが無限に拡大したのであって、そのため二つの現象はもはや繰り返しができない。その頂点に、国際的なローマの普遍文化はキリスト紀元の最初の2世紀に到達した。その諸形式は、しばしの期間、巨大化した帝国の精神的には疲弊した全ての諸地方において、権威と不可侵性を <sup>ほしいまま</sup> 縦にした観があった。それによって枠がはめられた静止状態だけが、

その後に事情を説明するに十分ということになろう。すなわち、ローマ帝国では、3世紀には未だ政治的力の衰えは始まっていたとはいなかったが、その時期すでに、藝術創造(Kunstschaffen)の分野では衰退が歴然と感得されるようになっていた。昔の民藝は、死んで消えていた。帝国の周辺で未だ使われていない民藝があつて供されはしたものの、地中海地域に数千年花を咲かせた藝術の満開である圧倒的なローマのモニュメント藝術にわずかなりとも影響を及ぼすには、あまりに低次かつ無意味であつた。民藝が結びつくには、藝術的要求と藝術営為の極端な低下を要した。すなわち、<sup>アンティーク</sup>古典古代から遺贈された諸形式が、藝術的実現の非常に低い段階に引き下げられたとき、世界帝国の周辺から迫りよる新鮮で多少とも未使用の民藝が、ようやく実りを期して新たにそれらとの結合を敢行したのである。しかしこうした民藝の担い手かつ守り手は、同時にまたローマ人の政治的統一支配に止めを刺した者たちでもあつた。ローマ帝国の崩壊は、北方の征服者のなかに族長制的な家族団の再登場をうながしたのではなく、低下したギリシア=ローマ藝術の代わりに北方の民藝が位置を占めることができたわけでもなかつた。中世開始期の新たな形成体の集合における規準的な要素は、政治においても藝術においても古典古代であり続けた。なぜならそれが強者だったからである。野蛮人の首領たちはローマの故土に国を建てたが、それはローマの伝承への千年に垂んとする関係との接続であつた。ちなみに、中世の西ヨーロッパに開花する藝術をロマネスクと称するのは、まことにもつともである。最後に、この並行関係には第三の契機、すなわち経済の契機を見落とさないために、もう一度、ゲルマンとロマンス系の中世の賦役農場(Friedhöfe)に注意を払いたい。まことにこれらは、古典古代世界の奴隷経済と同じ経済システムに立脚していた。それはとりもなおさず、家内作業の第二の階梯、すなわち不自由の仕組みという変化をきたした階梯であつた。

野蛮人が、比較的短期ではあれ、ともかくも政治的・藝術的な新形式をローマの故土に呼び起こすことに、ともかくも成功した。これが明らかになるのは、主に野蛮人が北方の森から準備もなく直截的に姿をあらわし、しかも課題へと歩んだからである。オドアケルと共に、西ローマ帝国に最初のゲルマン人の支配者をあたえることになるよりも前から、彼らは、本来の国家形成の分野でもローマの藝術の分野でも、幾度も試みをしていたのであつた。いわゆる青銅器時代の出土品についても、そのうちの何が土着の民藝であり、何が地中海藝術の影響の下に開花したのかが今もなお議論されていることに徴しても、帝政期ローマの5世紀については誰しも、この時代に中部ヨーロッパと北ヨーロッパはローマ時代であつたと語ることに異論の余地があるまい。その種の出土品の多くは南で作られ、輸出品として北へもたらされたのかも知れない。しかし疑いもなく、そうした出土品の大多数は、それが脚光を浴びた地方で作られ、それによって地中海藝術からの影響が抗いようもなく証明された観がある。その一方、遠隔地で発掘されるほどにまで知られて

いた個々の金属技術の進歩が支配的であったことは、それらの地がプリミティブな家内作業に留まっていたとの見方とはもはや結びつかない。ゲルマン人のあいだでは、すでに部族時代には少なくとも部分的には賃仕事への移行が起きていたのは確実と見なければならぬ。そしてこれらすべては、何はどうかであれ、ゲルマン人が西ローマ帝国のそれまでの属領の政治的支配者となった後、比較的早くそこでの諸関係に溶け込み、遺産の継承者たるラテン人と手をたずさえて新たな政治的・宗教的・藝術的まとまりへと進んだ所以を説明してくれよう。

ローマの普遍藝術、そして少なくとも間接的にはローマの経済システムは、ローマ人の政治的支配が一度も及ばなかった地域にも浸透した。したがって、ヨーロッパ地域の中世にプリミティブな家内作業と民藝をたずねて鳥瞰を図るなら、ゲルマン人に発する諸民族に限定して中部・東部ヨーロッパを探索するのではなく、ヨーロッパの東部の事情にも眼を転じなければならない。すなわち、ゲルマン人に代わって、次第にスラヴ人が進出していた地域である。これらスラヴ人はいずこの土地にあっても、ゲルマン人ほどには根底から中部ヨーロッパの影響を受けてはいなかった。彼らも、古来の西部・南部の文化的拠点の近くまで進出しはしたが、その状況は、家内作業と民藝の伝統を保ち堅持する上でこの上なく好都合の条件下においてであったと言わねばならない。なぜなら、今や文化の担い手となったゲルマン人であったが、中世初めの数世紀は、みずからの域内で政治的・経済的・藝術的関係をかためることに汲々としていた。その平治がある程度成功した後にはじめて、征服慾に燃えるゲルマン人と、エルベ河流域やアルプス地方へ深々と進出したスラヴ人とのあいだで敵対的な接触が出来た。しかしゲルマン人の拡張志向は、西部と南部で混乱に巻きこまれて、ほどなく方向転換を余儀なくさされた。それに比べてスラヴ人はその性状に従って別種の動きを見せていた。他に移ろい行くことなく、その生きるあらゆる分野において伝統の流儀に固執したのである。ゲルマン人の政治的野心や放恣な征服慾や商業慾は、スラヴ人には欠けていた。同時代人によって描きとめられたように、彼らは慣習において優柔温和であった。彼らにあっては族長的な家族団が歴史時代においてもなお明白に存在した。ほとんどどこを見てもそうであるが、国家形成に至るのは、ゲルマン人の進出を待たねばならなかったのである。彼らは奴隷制の仕組みを知らなかった。隷属関係も、ゲルマン系・ラテン系諸国のような截然とした形態をとらなかった。

これら恵まれた事態が重なるなか、ヨーロッパ東部では家内作業とそれに密接な民藝が継続し、しかも優勢でありつづけた。片や、ヨーロッパ西部と南部では、賃仕事から工房手職への進みがいよいよ速度を増し、さらに16世紀からは工場制と問屋制家内工業が実現し、それと並んでインターナショナルな様式が交替した。ロマネスク、ゴシック、そして数種類のルネサンスの諸様式である。もとよりヨーロッパ西部との接触が絶えて起きないなどはあり得なかった。接触は次第に高まりを見せ、相応の結果をも招いた。経済的・

藝術的伝統の原初の純粹はところどころで曇りを帯びたであろう。特にヨーロッパ西部へ延びた場所ほど、それが早くあらわれ、かつ強烈であった。その好個の証左はベーメンであった。しかし影響は、永らく、上流すなわち支配者に限られていた。<sup>フォルク</sup>民の多数である地方民（Landvolk 村落民）は、貴族のあいだでの嗜好の変化に無縁であった。家内作業と民藝それ自体は、人類の経済的・藝術的発展の至高の理想ではないことを、ヨーロッパ東部の支配者たちはすでに中世初期から知っていた。それゆえ、都市の形成や都市的な賃仕事・工房手職の定礎にはドイツの市民組織（Bürgerschaften）の導入を待たねばならなかった。これはオーストリア=ハンガリー帝国の場合、ガリチアやジーベンビュルゲンにおいて多数の事例によって跡づけることができる。しかし村落民は、一般的に、そうした影響に触れることがなかった。これらの諸地方もやがて西ヨーロッパ文化圏に属する国家連合へ親しく組み込まれていったが、それによってすら、そこでの諸関係は何らの変化もきたさなかった。ザクセン朝の皇帝に属した辺境伯ゲロがエルベ河流域のスラヴ人を根絶せしめた時期を境に、彼らの慣習は穏やかとなり、政治的な行動原則は融和性をつよめた。しかしその一方、今日の意味での商業原則はなお作用することがなかった。先行した工業国家にとっては、工業が貧弱な国々を工業生産品によって福をもたらすことが政治行動の本質的な対象とされたときの商業原則である。そのため南スラヴでは今世紀（=19世紀）にいたるまで、いわゆる家内コムニタス（Hauskommunionen）が維持されてきたが、それは後世のものではありながら自立的な族長制的家族団の忠実な写し絵でもある。ちなみに、北スラヴの諸地方でも同じ経済的基礎の上に原初の賦役関係がおこなわれていたが、そこでは今世紀半ばの途方もない転換によって族長制的家族団は排除されたのだった。

科学技術の発明にしたがって浸透した交通の軽便化がはじめて、現代、東ヨーロッパでもプリミティヴな経済的諸関係を決定的な圧迫・根絶へと扉を開け、部分的にそれを現実のものとした。オーストリア=ハンガリー帝国では、かねて西の革新意思と東の持久性が相接しつつ生きてきており、またその二つの不均等の力は正に今も相克を演じている。ここでは、攻撃的な現代があらゆる外面において優勢であるが、他方、当該諸族の計算と保守一方の感覚が、守勢に立つ土着の伝承を支持・防衛している。そうした状況下、私たちがオーストリア=ハンガリー帝国の今日この時点で、これら数世紀前にはなお無制限におこなわれていた経済・藝術の諸関係をなお比較的少なからぬ延命を目の当たりにするのは、正に奇蹟と言うほかない。

そこで私たちが頻繁に出逢うのは、家内作業から賃仕事への移行形態の多様なことである。殊に目立つのは、少なくとも村落部では、工房手職（Handwerk）が先ず欠けていることである。今日ではむしろ、プリミティヴな諸形態に直接的に工場システムあるいは家内手工業が接続している。他方、通常の発展では中間項となるはずの工房手職はまったく

欠落している。もとよりヨーロッパにおいて家内作業を最初期の階梯において見出すことは、誰も期待し得ない。家族団も、あらゆる欲求を自己の家政内で満たすような状況ではあり得ない。欲求の幅が広がり、それを満たす原材料はどこでも見つかるのではないからである。それゆえ最も保守的な農民すら、たとえば材料にする金属を購入するか物々交換するしかないのが通常である。陶土ですらどこでも採れるわけではなく、そのため先史時代からセラミック製品は重要な交易品であった。遠近はともあれ、各地に町や定期市があり、そこでは農民以外の人々があつまった。農民も昔からそこで自己の家政の余剰物を売ってきた。それは農民にとって、先に挙げた事例で言えば金属の道具や陶器を入手するためであった。しかし原材料が調達不能あるいは技術的に製作が困難である物品はともかく、それ以外のすべてが、東ヨーロッパの各地では、今日なお純粋な家内作業によってつくられている。言い換えれば、自分で調達した原材料をみずからこしらえた道具をつかい、自分の労働でつくるのである。スラヴ人の村落民衆の没欲求のなか、みずから手がける自製性が、購入するほかない制約を圧倒している。そのため、それを真正かつまっとうな家内作業と名指すことができ、とりわけ文様を射程におくなら、民藝そのものと見ることできる。

なるほど、今日のヨーロッパでは、プリミティヴな時代の絶対的な純粋性の下にある民藝に出逢うことは期待し得ず、民藝がプリミティヴな家内作業の観点で正当化されることも期し難い。プリミティヴな族長制下の家族団がなお忠実に保たれている南スラヴの家内コムニタスすら、すでに今世紀(=19世紀)初めには、人間の文化発展の無交通の初期においてプリミティヴな家族団がそうであった互いに孤立性の状態からは隔たりあるものとなっていた。それどころか今日では、地球上で、家内作業と民藝を伴うプリミティヴな家族団の厳密な写し絵をしめすが如き人間集団に出逢えるかどうかもはなはだ疑わしい。この方向の判断は、今日の研究状況からは歓迎されまい。なぜなら旅行者の報告、それどころか学問的に観察をおこなうエスノログの報告においても、エキゾチックな自然民族の経済的諸関係は(まったくふれられないとは言えないまでも)副次的にしかあつかわれなからである。それゆえ、将来的にはエスノロジーの研究は調査対象となった諸民族の経済的諸関係に然るべき注意を払うことがのぞまれる。

さはともあれ、すでに古代にあっても、家内作業はその第二の階梯を知ることになった。プリミティヴな経済的生産のあらゆる本質的特徴をまざまざともってはいるが、その間に到来した奴隷制の外的ファクターの然らしめるところとして(経済史上その次に来る大きな発展階梯である賃仕事を準備するような)ある種の変形をこうむったのである。そこで家内作業の近代までの名残りを判断するには、(人類のプリミティヴな発展段階において交通手段を欠いた時代にのみあてはまる、いわば抽象的な定義の一つとして加えねばならない)ある種の計数を考慮する必要がある。真正の民藝の定義にふくまれる特徴が、

今日なお見出される民藝の名残りにどの程度までみとめられるのかを、これから調べてみたい。民藝の特徴は、その形態が当該の民のすべての成員に知悉され実際に使われるものでなければならないことに存すると言ってもよい。もとよりこの点は、今日のヨーロッパではどこにおいてももはやそのままではあてはまらない。中世においてもすでにそれは無限定に妥当するものではなかった。政治史が推移するなか、ある種の身分制度が発生した。民藝に忠実でありつづけたのは、プリミティヴな時代に唯一無二のものとして存在した身分、すなわち農民身分（Bauernstand）であった。民藝の第二の本質的な特徴として私たち挙げてきたのは、少なくとも表層的に見るかぎりでは形態を支配しているのは不動のものとしての伝統ということになる。外来の要素がこの伝統に浸透するところでは、民藝も、その特殊な性格を失い、インターナショナルなモードに場所をゆずるしかない危険にみまわれる。プリミティヴな時代に自給自足的な形態に恒常的にとどまることを得させた状況は、絶対的な無交通においてであることを先に見ておいた。東ヨーロッパ諸国がたがいに交通をもち、さらに広くその周辺とも交通しあうようになったのは、けっして近代の鉄道などによって初めておきたわけではなかった。すでに比較的低次の文化段階にあっても避くべからざるものと感じられたある種の必要性が、中部・東部ヨーロッパにおいて先史時代においても商業交通をうながしていたことは疑えない。先にふれたように、金属がそうであり、実際それはどこにでもあるものではなく、容易に加工できるものでもなかった。次に陶器もそうであった。陶器が地域性をもつ生産物であるのは、それに適った陶土が採れる場所に左右されるからである。この商品とともに、それに付いていた藝術形式も北方へ渡っていった。中部ヨーロッパ諸民族の藝術製作にそれがどれほど深甚な影響を喚起したかを、私たちはいわゆる青銅器時代や鉄器時代から優に知ることができる。それゆえ私たちは、東部ヨーロッパの民藝についても、幾世紀を通じてインターナショナル藝術の側からの影響が取り入れられていた可能性にも目を開く必要があるであろう。

それゆえ、今日の藝術的現象にちなんでお民藝に含め得るやも知れぬものを明確にする上で、先に挙げた民藝の定義を（p. 89）十全かつ厳密にあてはめるとすれば、この術語（＝民藝）にはそれだけの資格をあたえるわけにはゆくまい。と言っても、私たちは定義なしではすませることはできないであろうし、また定義の根底にある経済的諸関係への注目を欠かすわけにもゆかない。私たちが民藝の名残りを推測できそうな場合、その都度その都度の生産の経済のあり方を丹念に検証することを措いて、他に何がその名残りへと導いてくれるだろう。そこで正面に立つのは家内作業であろうか、それとも賃仕事であろうか、それとも輸入された交易商品であろうか？ しかし家内作業的な（それどころか賃仕事に該当する）生産を確認することによって、民藝的な核をその上に被っている藝術形式を剥いで取り出すことが可能であるなら、美術史的な批判検証をはじめることができ、言い換えれば、追加された透明度の低い計数すなわち歴史的＝インターナショナルなものを



取り払って、純粋に民藝的なものを裸にしてしまうこともできよう。

さらにこういう様相をも勘案することができる。もっともその重要性については今日のところは予想できるにすぎない。つまり民藝の現にある名残りにより深く入り込んでその全き意味合いの十全につかんだ後のことである。ここで言うのは、藝術製作の分野における後退造形（Rückbildung）の現象であるが、オリエント諸国ではそれがまぎれもなく観察される。またヨーロッパの文化土壌においても、目下、重要な兆しはそれが擡頭していることを語っている。

これらの諸例にあっては、事態の推移は、通常、次のようであったろう。すなわち、かつてゆたかに培われた文化土壌が、政治的な転換が起きたために孤立にみまわれたこと、またその結果、まずは停止が、さらに事態が進むと、文化的分野のすべてにおいて後退が起きるほかなかったことである。一例を挙げると今日の小アジアがそうであり、かつて隆盛をきわめた諸々の文化地点に、私たちは純然たる家内作業による文物生産に出会う。進歩した藝術形態はもはや取り除かれたりはしないが、それらもまた必然的にある種の制約を受け、民藝的な性格に接近している。そうした（誰が見てもこの上なく興味深く意義大きい）諸関係の判断にさいして決定的な役割を果たすのが、一面では美術史的考察であり、他面では経済的な生産関係の克明な観察であることは、火を見るよりもあきらかである。

一つの民（民族）の文化と経済的発展が進めば進むほど、その（民・民族の）民藝の名残りを突きとめるのが難しくなるのは理の当然であり、それゆえ熟考した美術史的批判作業の重要性が増す。すると、高度な市民化に達したドイツでも、今日なお、昔の民藝の痕跡が随所で見紛いようもないことも疑いの余地がない。ここでは、エルベ河流域における刺繍と北ドイツの農民家具を挙げるにとどめよう。またアルプス諸地方では、たとえばチロールの腰帯には古ゲルマン衣装の構成部分であった金属のアップリケがついている。また木や骨に銀象嵌をほどこすのも、疑いもなく非常な上古の民ならではの習慣に遡及させ得よう。さらに、東へ進めば進むほど、すなわち経済的な諸関係がプリミティブである度合いが高まるほど、そうした諸関係とそれらが個別であるがために帯びる陰りと移行を注意深く観察するなら、民藝的な諸形態がみとめられることになり、美術史的検証のために残されるものも少なくなるばかりである。なぜなら、ヨーロッパの東部でも家父長制時代の純粋な家内作業はもはや存在しないとしても、そこではなお疑いもなく濁りの少ない農民家内作業を告げる経済的な諸現象に出逢い、同じく民藝にもなお出逢うのである。その民藝は、先に挙げた定義の意味では決して絶対的なそれではないが、しかし不可避の濁りにもかかわらず依然それであることは見紛いようがなく、またそうした性格にあると指摘してもよいのである。

家内作業と民藝の延命について好例となるのは、ヨーロッパ東部ではブコヴィナ（現代

ではウクライナとルーマニアに等分してまたがる地域名)のルーマニア人であろう。彼らは言語的にはロマンス語に属しはするが、全体としてそれを満たしているのはスラヴの民族体(Volkstum)である。また彼らの居住地の地理的な位置の然らしめるところ、この民(Volk)は幾世紀を通じて西方ならびに西方の商業や新しい動きとは疎遠でありつづけた。それゆえ、そこで家内作業が比較的純粋な形態で生き残っていることは、私たちを著しく驚かせはしない。

なかでも、ブコヴィナのルーマニア農民が完全に自己経済としておこなっているのは彼らの衣服である。亜麻と大麻は彼ら自身が栽培し、梳き、紡ぎ、布地に織り、漂白する。羊と山羊も、彼らが飼育し毛を刈りとり、染め、布地や厚手<sup>ローデン</sup>地に織り上げる。亜麻はシャツに縫い上げられ、刺繍で飾られる。男性のズボンや女性用衣装のための種々の布地もつくられる。羊やヤギの毛からは、女性の上着や男性の胴着、さらにエプロンや絨毯やフェルトの布団や腰帯その他がつくられる。同じことは、皮革や手袋や藁帽子についてもあてはまる。

そこにおいて民藝を端的にあらわすのは、女性用衣装の胸部や袖にほどこされる刺繍で、ルーマニア人のあいだでは、デザインだけでなく、殊のほか華やかで鮮やかな色彩の取り合わせが持ち味である。

そうなると、ルーマニアの農婦は、たまたま自家用の織物が良い値段で現金になったときは大いに喜ぶであろう、とは容易に推測できることである。事実、彼女は久しい前から、チェルニウツィ(ウクライナ西部)のマーケットへ卵や鶏を運ぶだけでなく、他の品々をも携えて、チャリンと高鳴る銭音と交換してきたのであった。実際、冬場のために織りあげた絨毯を当面つかわない季節にマーケットへ持って行き、卵や鶏と他の食品類と一緒に並べずにおれるであろうか?ところが、彼女がそうした決断をするとすれば、それは聞いたためしがないことになるであろう。それは私たちにはまったく理解に苦しむような事態なのだが、それだけにまた否定しようのない事実として私自身もしばしば実地に知ることになった状況である。私にはそれは重苦しい思いが残るもので、それがために自分の主たる使命から逸脱しかねないまでの経験でもあったが、例外なく出逢ったことがらがある。ルーマニアの農婦は、彼女が家で使うため自分でつくった品物売ることを基本的には拒否するのである。しかも、その要点は名誉にある。農婦の頭のなかでは、彼女自身や彼女の身近な関係者ではない他の誰かが、彼女が手でつくったものを身につけたり所有したりすることなど、考えもよらないのである。

これを他の多くの人に分かってもらうためには、ブコヴィナのルーマニア人農婦がその持ち物である布地類についてどれほど頑なであるかの一例をあげようと思う。それはベッサラヴィアとの境界にちかいノヴォセリツツァ(ウクライナ/チェルニウツィから東へ約50km)という村であったが、地主にして代議士であり、富裕な名士でもあるフォン・ツォッタ博

士が、その村のある木造の小屋に私を案内してくれた。博士は、その家の主婦が何らかの理由で衣類や絨毯の相当のストックをもっていることを知っていた。フォン・ツォッタ氏が、その宝物を私たちにを見せてくれるように頼むと、彼女はそれをはねつけるどころではなかった。むしろ虚栄心をくすぐられたらしかった。ひょっとしてと考えて、それらの品々を売る気はないだろうかと尋ねたところ、予期した通り、きっぱりと断られた。取りつく島もなく、二度と売ってくれないかとは言えない有様だった。そこでフォン・ツォッタ氏は、チェルニウツィで開催されるオリエントと地元の繊維工藝の展示会に並べるためにシャツ一枚を数週間貸してくれないかとたのんだ。しかし農婦は理解しなかった。彼女には、フォン・ツォッタ氏の誠意はともかく、衣類を外部へ出すというモチベーションはなかったのである。次いでフォン・ツォッタ氏は、百グルデン紙幣を一枚取り出して、品物をいつ返せるか確実ではないことをも含めた担保だと説得した。百グルデンと言えば、西側の大都市ならいざ知らず、ブコヴィナでは途方もない金額のはずである。ところがそれすら、農婦にはまったく効果がなかった。彼女の拒否の姿勢は変わることがなく、結局、チェルニウツィの人々は、ノヴォセリツァの衣類を見る機会を得ないまま展示会を閉じたのである。

私たちには農婦の態度は偏屈きわまるものと思えたが、それはどう説明すべきであろう。彼女は、未だ使ってもいない衣類を27点ももっていたのだが、その一枚だけでも百グルデンを超えるような価値になるはず、などとは微塵も考えてはいなかった。とすれば、そのとき彼女の頭を占めていたのはどんな大きな観念だったのだろう。自分が作って刺繍をほどこしたシャツを危険にさらすのは不当なことと彼女が考えていたのは明らかだったと言わなければならない。それは、両親から受け継いだ慣習と伝統に沿った自分の本来の意図とは異なる、他の人々の気分のなかにそれをさらすことだったからである。資本の概念を知らず、労働を自分のためにおこなうという意味で、正に真正の家内作業である。その小屋を後にしたとき、農婦の偏屈な独りよがりへの怒りはすっかり消えて、私はむしろ彼女に讃嘆を贈ってさえいた。率直に言えば、そのとき〈黄金時代〉の人間の営為と慣習をまざまざと見る思いがしたのだった。

ブコヴィナのルーマニア人の村々をのぞけば、ハプスブルク帝国の東半分でも、純粋かつ汚れない家内作業のそうした事例は、当然ながら、もはやきわめて稀となっている。大多数はフツール人、すなわちガリチアの南東隅のカルパチア地方にかけて居住するルテニア人のあいだである。帝国東半のハンガリー部では、近代の開始期には、ツイスライタニエン（奥・洪二重帝国のオーストリア帝冠領）の東域諸方よりもさらに経済的諸関係は古習を残していた。すなわち軍事境界線の一帯は、家内コムニタスの仕組みを伴いつつ、見紛いようもなく家内作業生産を保存していた。しかし他でもなくトランスツイスタニエン（ライタ川の彼方＝ハンガリー王冠領）の諸所において、延命した諸関係のかかる残余存在に介

入が起きていた。今日の資本主義の意味での新しい経済的利点の源泉へ村落民衆をみちびくためにこれらが手がけられたのである。それによって、家内作業も民藝も事実上消えさるほかなかった。ここにおいて、私たちは、民藝の分野における今日の焦眉の問題に近づいた。

### 第三章

前代の幾世紀に東ヨーロッパ諸国の民藝について考えられていたのは、早くスラヴやハンガリーの諸王が西方の産業作業（Gewerbefleiß 産業勤労）ならびに藝術作業（Kunstfleiß 藝術勤労）を彼らの諸国にも取り入れようと図ったのと変わらなかった。民藝はその地に存在しており、誰もその根絶を意図してはいなかった。しかしまた東ヨーロッパの諸方の貴顕人士や広く見聞を持つ人々や都市民にとって、西方の国際的な藝術がより高度に発展したものであり、それゆえより高く評価されるべきものであり、状況がゆるせば彼ら自身によっても目指すべきであることには、露ほどの疑いも生じなかった。国際的な流行藝術モードと民藝のあいだの関係を別の観点から見るようになったのは、私たちの時代がはじめてもつ特質であった。

この世紀（=19世紀）の半ばに、藝術工房での製作の分野において改革志向がたかまるようになってはじめて、（オーストリア=ハンガリー帝国に属す限りについては）東ヨーロッパ諸国の家内作業と民藝への注目が各方面でなされるようになった。しかもその注目は二方面から湧きおこった。藝術の側面と経済の側面である。

特にスラヴ人とルーマニア人の所産に突然向けられるようになった藝術的な関心は、19世紀半ばの国際的な工藝がもつ諸関係の進展に直面して感得されるようになった不満の直接的な結果であった。湧きおこるがままに、文化運動の頂点に位置を占めた。そのみずみずしい民族要素のおかげで、中世は、古典古代の伝承から自己にふさわしくまとまった独自の藝術様式を築く力をもった。すなわちゴシック様式である。この様式が燃え尽きると、中世の藝術運動の担い手であったラテン系人とゲルマン人は、自己をふたたび古典古代アンティークと繋ぎなおす動きを起こした。ルネサンスにあっては、意味多い藝術的営為への到達は、古典古代への過度な依拠をまたずともなお可能であった。そして終に、古典古代へのあからさまで不毛な模倣とまでなったのがアムピールであった。そこにおいてサイクルは閉じたかとも思える観を呈し、途方に暮れるような事態がはじまった。それがしばしば続いた後、最後に決断となった。アンティーク古典古代を後にした今、そこから導き出された歴史的な諸形態、すなわちゴシック、ルネサンス、バロック、そしてアムピールまでをもう一度使おうとの試みである。しかもその試みに取り組んだのは、ゴシックなどの模範を示したのと同じ（さすがに往時と同じ部族というわけにはゆかなかったにせよ）文化集団で

あった。それゆえ、今日の指導的な諸民族がこれまでのところ、昔の歴史的な諸様式を新たな様式をつくりあげてをめぐって手に負えないかの様を見せているのは、決して不思議ではない。今日、事実として、新しい種類の藝術創造への約束多き萌しを見せているところ、たとえば絵画の分野では、過去に延びる架け橋を能うかぎり断ち切り、私たちのラディカルな科学技術的・経済的な大転換が生成したのと同じ新しい土壤に足をすえたのである。もっとも、これは古典古代からアムピールにいたるサイクルがもういちど経過し、しかもこれという果実につながらなかったことを踏まえての反省意識でもある。少なくとも、1860年代や70年代には、目に見えるかたちでは果実を得てはいなかった。わずかに直近の歴史的な形成について、当時こういう声が希望として言われたにすぎなかった。どんな藝術のあり方ものぞましい、と。それは1840年代や50年代の古典主義、またロココが水で薄められたようなものを思い起こせばよいわけだが、またそれにかざられるものでもない。かくして、たとえばオリエントの藝術への熱狂などへ動静は向かった。折からのウィーン万国博覧会（1873年）の時期がその頂点であった。

時間的にも空間的にも遠いところにある藝術を取り上げることが現代藝術の実り多い再生をもたらす救いとして期待されたのであるが、そのまっただなか、視点が行き着いた先であった。すなわち19世紀半ばを超えてもなお広く村落地方ではそれが生きて行なわれていること、現代的な影響がそれを瀕死に追いやっていること、しかしなお膨大な数の遺品が実証として存在することに目が向けられた。往時の社会の精神状態をまざまざと思いうかべよ、さすればそれらはつかむことができるものであることが見いだせよう、その赴くところ、民藝の諸作品に、これまで明るみに出なかった黄金とかがやく途方もない価値をもつ財物をこれからの生産のために見出すことができる、と考えられたのである。民藝の諸作品に自然に付随する諸々の長所、すなわち押しつけがましくない素朴や着想のナイーブ、形態をことさらしく整えることから程遠く、色調には喜びがあり、しかも多くの場合その色調は当を得ている、これらが、その世代には二倍にも三倍にも恵みと約束の輝きを放つものと映ったのである。たちどころに目につくような欠陥をも長所とみなす傾向が起き、それに倣うことが推奨された。言い換えれば、上古の技術を体現する骨董とみなされたのである。そうした見方は、折から機械に対して感じられた忌避の感情と重なっていた。なぜなら、ヨーロッパ中を襲った藝術的な退廃の主たる責任は挙げて機械に帰せられていたからである。技術革新への当然の反発から、幾世紀を貫く藝術とは言っても事実は瓦礫の山から掘り出した古い技術を、どんなものであれ多大の共感をもって迎えることになった。こうした民藝の所産（Volkskunst-Erzeugnisse）という新発見が熱狂的に迎えられた様は、あたかもシャンパンを飲み飽きた人が泉に湧く生水を前にするなまみずようなものであった。要するにこれこそ藝術の秘薬と思いこんだのだったが、そのさい、水の傍らにとどまるのも早晚飽きるものであることには、ついぞ思いつけなかった。人間精神の

自然な動きとして、一度は歴史に埋没はしても、翌日にはさらに高い品位に到達しようとするものであることも見落とされていた。

これらの藝術への価値づけでは、近代的な藝術製作に及ぼす功業として過大評価されたものだが、そうした誤解の仕上げになったのは、それらに科学技術的な名称 (technische Bezeichnung) を冠したことであった。すなわち問屋制家内工業 (Hausindustrie) である。筆者のこれまでの考察に照らせば、また東ヨーロッパの諸々の民藝に徴しても、工業の語をもちいるのが不適切であることは言を要しまい。もっとも、この誤解が生じた所以の一つに、事実としてこれらの民藝の所産が、所によっては、また場合によっては、マーケットに並べられる事実がある。ヨーロッパ東部の場合も19世紀半ばであれば、家内作業のプリミティブそのものといった階梯ではなかったことは明らかで、それはこれまでも強調したところである。交通と都市化は、微弱とは言え東ヨーロッパでもいたるところに浸透して、村落民のあいだにも、自己の家政のなかでまったき充足を期し得ず現金で購入するほかない欲求を喚起した。かくして、ノヴォセリツアの農婦ほどには良心の呵責を感じなかった者も少なくなかったところから、それぞれの自家の調度品がありあまるほど売りに出される事態ともなった。とは言え、それはやはり例外であり、それだけでは、これらの農民的な生産品に〈問屋制家内工業〉という間違った名称が選ばれた理由は説明しきれない。原因は多分に、私たちの社会が19世紀半ばに置かれていた精神的様相にあり、その様相は、その少し前から高まっていた民藝の過大評価と多少は矛盾するものでもあった。しかしまたその矛盾は、通常、ありとあらゆる錯誤をも伴うのが常でもあるが、それが認識されなかった。要するに、東ヨーロッパの民藝については上古性、非近代性、伝統からの継続性のゆえに評価・価値づけされたが、その一方、高度に近代的な資本主義の観点に強いられて、それに名称をあたえたのだった。実際、その見方をとれば、まったくその虜になってしまうがために、自由に語ることはできなかった。交通と物品のサーキュレーションの経路に入ることによって有用とされた物だけが、存在を要求する資格があるように見えたのである。私たちは、伝統的な農民的生の概念によって特定してきた。それは意味のないものではなく、認識を伝えるものではなく、むしろ当該の独自性を明瞭につかみ、評価するための微妙な手立てに当時は事欠いていた。ナショナル家内工業 (nationale Hausindustrie) という言い方になったのはこのためであった。とは言え、これまでも見てきたように、関心をもった人々の注目をさそったのは、先ずはそれらの藝術的な質でもあった。

しかしまた、人を、このナショナル家内工業に一層深くかかわることへと誘う別の面もあった。これらが保持されていたのは地方村落であったが、そこでは何世紀かをけみするあいだに村落民衆の経済的状况に見紛いようがないまでに変化が起きていた。それは国をうごかす人々のあいだにも、あらためて対策を考えさせずにはおかなかった。主要には工

業が大発展する一方、それと並行して地代は低下した。それがために、大昔からの土地と有機的にむすびついていた農業民衆、なかでも近年まで自給自足的な家内結合すなわち家内コムニタスが中心であったハンガリー南部の農業民衆は、誰の目にあきらかなように、たちまち窮乏にみまわれる。土地や地所は農民をやしなうにはもはや豊かではあり得ず、農民を射程に置いて新たな収入源を切り開く必要があった。ちょっと目にはことさら探り当てた観を呈しなかったものの、〈<sup>ナショナル</sup>国民的自家工業〉は正にその一つであった。農民はもともとさまざまな種類の手わざをもっていた。家内作業による生産がそれをもとめたからである。それらの手わざに、農民はさらに磨きをかけた。調度品をマーケットに出し、それによって農業ではまかない切れぬ家計の穴をうめるためである。これによって、農民にその大昔から親しんだ生き方を維持させ得ると思われたのだったが、いったん呈示されたその道は、農民が経済的な脱出を図り得る道でもあった。しかしそれを関係する人々の眼に理想的な道と映じさせたのは、その頃の状況であった。すなわち、〈ナショナル家内工業〉の諸形態を起き得べき没落から救い出すことができると思われたからで、それどころか何はともあれ先ず広めることができると考えられたからだった。それによって一石二鳥の首尾に達するとも思われたのである。一つは、困窮した村落民に経済的な力を得させることであり、しかもそれは彼らをその昔から慣れ親しんでいた経済的な関係からひきはがさずすむものであった。二つには、〈ナショナル家内工業〉の藝術的な質を広めるという明確な意識であった。この場合それは端的に民藝を指していた。

ここでの課題は主に民藝と結びついた諸々の問いを明らかにすることであるため、取り上げる問いを限っても十分であろう。とりわけ、二つの問いの二つ目、すなわち〈ナショナル家内工業〉がもつ藝術的諸形態の保存と広まりにかかわることがらである。経済システムと藝術生産のかかわりを支配する内的な結びつきは、私たちが何度も経験してきたものであるが、それを見るにあたっては、目的を追うだけではなく、一つ目の点、すなわち経済的な側面も検討しなければならない。それを先ず取りあげようとおもう。それはこれまでの考察において、先ずは家内作業の本質をあきらかにし、それを踏まえて民藝の本質へと進んだとの類似である。

ナショナル家内工業をいつくしんで目標にすえ、村落民に物質的収益を増やす源泉を開拓し、しかも村落民をその昔から慣れ親しんでいた経済的な関係からひきはがさずすむとされたとき、少なくとも最後の項目については錯覚に陥っていた。農民が従事するとされた経済システムであるが、それは農民によって伝統から持ちつたえられたものにとどまらず、基本的には、それからの保護をもくろんだ工場システムとも同じく<sup>モデルン</sup>近代的で資本主義的であった。それを明らかにするために、古い生産から新しい生産への移行がどのようなであったかについて一例を挙げて検討しようと思う。

ある村で、絨毯織りの手わざが〈ナショナル家内工業〉として保存されてきたが、収入

を得るための生産として大量に売るように組織化が図られた。それに先立って困窮時に数点の品物をマーケットへ出したところ、都市の愛好家がただちに買いとった。そこで農民たちは、絨毯を、これまでのように自分たちが使うためだけでなく、多くの時間をついやしてマーケット向けにストックを準備するようになった。ある程度時間をかけて説得して他の農民をも確保し、それが生業になるまでになった。しかしここでただちに難問が発生した。農民には絨毯のストックをつくるに必要な材料がままにならなかった。彼の飼っている数頭の羊は、農民とその家族の用に供する羊毛の品物をつくるだけのものだった。それ以上の材料はたちどころに枯渇した。それゆえ外から調達するしかなかった。一言で言えば買うしかなかった。私たちが知るように、これによって家内作業による生産は、その材料が自己の家政のなかで育成され準備されるという意味では、根底から崩れさった。しかも農民には、材料を購入するだけの資金が自由にならなかった。農民を搾取と借金に追いやらないために、走り出したこの行程の仲介人や企画者は全行程を自分の手中におくほかなかった。経費をすべて受けもつ私人（ときには国のこともあった）は、その資金で原材料を大量に仕入れ、それを農民の機織り人に好条件で提供した。したがって、生産のこの方式では、原材料の最初から投資として産業資本が活動していたことが分かるが、それは古来の生産では問題にならないものだった。

ところで原材料は首尾よく調達され、嬉々として織りへ移って行く。ある程度多数の枚数の絨毯が織られると、それらは販売にまわされる。絨毯をたずさえて町へゆくと、年の市で農民は自分の（それまでは数も限られていた）品物を売ることに慣れていて、しかし小さなマーケットでは、大勢に向けて用意された絨毯は捌けようがないことがあきらかになる。農民は、マーケットの限られた顧客の需要しかない状況では、捨て値で手放すしかなく、場合によっては、品物を家へ持ち帰って放っておくことになる。そうした在庫は、たしかに昔もありはした。私たちが見たところでも、ノヴォセリツァの農婦は18点のシャツを使うこともなく持っていた。しかし二つの事例は根本的に異なっている。ルーマニアの農婦の場合、シャツは持ち主がすぐに実際に使うものではなかったが、未使用だからとて被害にはならなかった。それに対して売れなかった絨毯は資本を寝かせていることを意味する。なぜならそこから労働を切り離せば、原材料に投資された資本は動かないからである。それゆえ、同じように見える二種類の生産方式のあいだには深い隔たりがあり、その点において、新旧の対比はドラスティックなまでになる。

しかしここでは、販売のために織られた絨毯のその後の運命にもどることにしよう。それらはもし売れないままであれば、それらに託された営為のすべてが結びつく最終目標が烏有に帰すことになる。それゆえ絨毯のためには、より広い販路を開拓する試みがなされねばならない。しかし農民には、遠方のマーケットを自分でたずねることなど思いもよらない。そこで仲介には商人がかかわってくる。〈ナショナル家内工業〉の行程のなかでは



それぞれの部分が連鎖をなしているが、これは一連の仕組みにおける通常かつ必至の締めくくりの鎖環である。すなわち消費者のもとにたどり着くためには、生産物は、商人という介在技術クンストを要するのである。

以上の行程をもう一度振り返って、それを家内作業と比べよう。家内作業では、生産者と消費者が同じ人間である。財物は自己の家政のなかでつくられ、原材料から出来上がった製品にいたるまで、一度として持ち主は交替しない。それに対して近代的な意味における〈ナショナル家内工業〉では、生産者と消費者が分離しているばかりか、財物は持ち主を何度も変えるまでして、最後に消費者にたどり着く。なぜならすでに原材料そのものが、織り手とは異なる別人の手にあったからである。

ここで描いた新たな経済的システムは、事実として産業（Industrie 工業）にほかならない。と共に、かかる新たな意味合いで専らもちいられるなら、そのために問屋制家内工業（Hausindustrie）の名称があてられたのは、まことに幸運な選択であった。そこに昔のナショナル家内工業と民藝が付着している限りでは、帰結として、ナショナル家内工業という言い方をすることはできるであろう。しかし古くから持ちつたえられた東ヨーロッパの村落民衆による家内作業生産と、この近代における真正の問屋制家内工業とは大きく隔たっている。後者は、発展史的には問屋制家内工業とほぼ同じ階梯にある工場システムでもある。ヨーロッパの西部では問屋制家内工業がひろくおこなわれており、そこでは問屋制家内工業は当然にもはや農民の家内作業との結合はあり得なかった。ヨーロッパの西部では、ツunftが除かれた後に工房手職（Handwerk 職人仕事）はばらばらになったが、それが問屋制家内工業の出発そのものに大いに寄与した。たとえば、フォアアールベルクの刺繍の問屋制家内工業を見てもよい。これは、農民が昔手がけていた家庭刺繍とは結びついていず、ごく最近になってスイス東部から導入されたのだった。しかし私たちがフォアアールベルクで目前にするのは、経済学的に見れば、ハプスブルク帝国東部でマーケット向けの生産にいそしんでいる〈ナショナル家内工業〉と同じような組織となっている。問屋制家内工業の生産の全体構成から見ると、その最も重要なファクターは、商品を持ち運ぶ商人が介在することである。彼は、村落部で大量に製作された商品を集め、買い上げ、そして消費者のもとへとどける。国民経済学は、そうした機能に、問屋（Verleger）の名称をもちいてきた。それに従って、最近では、問屋制家内工業（Hausindustrie）の語に代えて、問屋制手工業（Verlagsindustrie）の語が使われてきている。なぜなら家内（Haus）と言ったのでは、やはり何とはなく未組織の、ほとんどかりそめの役割を思わせるからである。だからと言ってそこでは労働者が労働時間の大半をその手工業製品の製作にあてていることを少しも否定していないとしても、なおそうである。実際、そこでの労働者は工場の屋内で働くかわりに自分の家で働いている。それゆえ、ビュッヒャー教授の適切な定義にあるように、問屋制家内工業は分散的な工場労働にほかならない。

したがって、村落民が古来持ちつたえた手わざを導入した市場向け商品の製作は、けっして過去何世紀もおこなわれてきた伝統的なものではなく、むしろ新しいも経済の軌道、それどころか最新のものである。この点で最初から錯覚が起きていたことになるが、だからと言って、最終目標、すなわち当該の村落民衆の民生全般を経済の面から活力あらしめ向上させようとの意図の達成には疑いをさしはさむ余地はない。なお誤解の危険を排除するために強調するなら、筆者は、我らが帝国の東方諸邦における問屋制家内工業の導入が何らかの良好な結果をもたらすことを疑っているわけではない。一般的に言えば、問屋制家内工業は経済学者にとっては理想ではないであろう。特に中間に立つ商人による利益搾取は、この生産システムの特異かつ頻繁に見られる欠点とされる。しかし西方では飢餓的な低賃金でしかない金額が、東方ではなお人々を立派に養うことができる。実際、少なくとも目下、そこでは生活維持はなお安価であり、さらに問屋制家内工業の導入とともに国の諸機関が商品製造を注意深く監視しているため、東方の農村地帯ではそれは民の福利に資するものとなっており、少なくとも今この時点では比較的良好な解決を得ているかのようである。

とまれ、私たちにとって本来主要な関心事である次の問いの検討へと進もうと思う。〈ナショナル家内工業〉を宣伝することによって、伝統的な民藝をその衰微からどの程度まで救い出したであろうか？ 実際、その方向の営為が経済面でのなりゆきを詳しく点検することによって、私たちはこの問いへの答えを容易なものにした。すなわち、近代の〈ナショナル家内工業〉はもはや昔の家内作業とは同じではなく、むしろまったく新しい、本質的に異なった経済的發展階梯にあることが明るみに出たとすれば、家内作業と民藝の相互交替を要する狭隘で解決不能な生存条件を前にしては、結論はすでに用意されている。すなわち、〈ナショナル家内工業〉において保たれる手わざは、もはや民藝ではあり得ず、それゆえ個々の形態と類型を保存することにはなっても、民藝を特徴的・根底的な特性を併せた全容において維持することには決してならない。このア・プリオリに得られる結論を裏づけるには、ほんの数点の議論を要するだけであろう。農民がその生産物を自分使いのためではなく、マーケット向けに作るようになった時から、藝術的な質の面では、先に家内作業の担い手が奴隷へ、さらにまったく賃労働者へと必然的かつ不可避的に移ったことを確かめた過程のあらゆる項目が入って来た。その労働は、もはや能うかぎり美しく最善の生産となることだけを目標とするのではなく、質を問うようになった。より適切な言い方をすれば、労力は賃金と需要に即して振り向けられるのである。しかし金銭を稼ぐことが生産における本来の推進力となるや、早晩、必然的に、生産コストをできるだけ低く抑えることに意がもちいられるようになる。古く家内作業にあつては、絶対的な財物が至高の最終目的であったのに対して、今や財物と製作コストのあいだで不安定に揺れ動くようになった。そうしたコモダイズムの思案がすでに質の低下を助長していた

証左として、筆者の実経験を踏まえて、先に挙げた絨毯の事例に今一度ふれてみたい。南スラヴ諸地方では問屋制家内工業が現実に行進し、商業のために絨毯がつくられるようになっているが、家内作業時代の昔の作品に比べると、織りはゆるく長持ちもしなくなっている。今日なお昔と同じ目の詰まった織りをもとめるなら、素材と時間にずっと多くを割かなければならず、それを加味した価格となると、どんな買い手をもひるませる位になるだろう。

藝術的な質にとってこの上ないマイナスと言うほかない事態は、製作のあいだに財物が頻繁に入れ替わることである。たとえば先に見たところでもあるが、絨毯を織る農民は、原材料すなわち撚糸と羊毛を購入しなければならない。羊毛はすでに染色されたものを買入れる。なぜなら、大量の羊毛を染める手段をもたないからである。ちなみに今世紀（=19世紀）を通じて化学染料が浸透したことによる大転換を思いうかべるなら、染色の新素材の登場が民藝にどれほど壊滅的な影響をあたえたかは一目瞭然であろう。ナイーヴな藝術製作の諸民族にあっては色調は本質的なものである。彼らの藝術的な眼力は、伝統的で多くは地元の植物による染料にこの上なく細やかに親しんでいる。そして今やその人々は他の色調を突きつけられている。彼らは当初、反発する。しかし新素材の安価には勝てず、また独自の染料を必要な分量まで調達するのが困難になるなか、全面降伏を強いられる。その効果は決して喜ばしいものではない、とは考えられよう。しかしその点の批判は差し控えて、それが民藝に惹き起す運命を問うだけにとどめよう。すると当然にも見えてくることだが、昔から慣れ親しんだ色彩世界から投げ出された農民は、自己の確かでナイーヴな藝術製作の本質的なエレメントを失ってしまう。

先に見たように、賃仕事への移行とともに競争がはじまる。より迅速に、またなろうことならよりよく、あるいはより安く仕事を進め、顧客を藝術的にも満足させて、織り子仲間を出し抜こうとする。そこから必然的に生じるのは、労働時間を短縮しようとの姿勢である。それは道具の改良によることもあれば、技術的な工夫のこともあろう。こうして通常、悪名高くなった〈古い技術〉は根こそぎにされ、それをマスターすることは退屈きわまるもの、時間の浪費となる。古玩愛好と実際とのあいだのかかる痛々しい窮迫のなかで、条件がそろった場合には二つのことがらの一つに帽子をかぶせて蓋をする試みが起きた。技術の保全と、しかし同時に道具の改良である。もっとも後者については、保守的な農民たちがその教えを受け入れるようになったのは最近のことである。家内手工業訓練校（Hausindustrieschule）設立である。そこまで行ったら、技術的なものから藝術的なものへはもう一步であった。形態と意匠ムスターにおいては、優れたことでは評判があったにもかかわらず、そこかしこで改良が加えられ、転換やアレンジ等々へと進まざるを得なかった。それによって、身分への藝術的關係において至極立派なものをもたらすことがあるかも知れない。筆者がここでも繰り返し強調したいのは、これらの影響によって目指された結果へ

の批判は差し控えたいことである。しかしかかる所産の総体は、もはや民藝と呼ぶことはできないだろう。

ここでもう一つのファクターを考慮しなければならない。これが最後のファクターで、またここでの関連で最も重要でもあるが、それは受け手である。農民の間屋制家内工業の所産は大部分が都市の受け手を念頭においている。ナショナルな藝術への熱狂が燃えあがり、さらに一連の動きまでなったとき、そこに大勢の受け手が存在したことは当然である。たとえばスロヴァキアやクロアチアやジーベンビュルゲンの垢抜けしない色彩のけばけばしい刺繍がどれほど高い価値を呼んだことか！ しかしそのフィーバーも、今、見るみるうちに退いている。私たち近代の文化人間には新しいものに飢えているところがあり、インターナショナルな流行<sup>モード</sup>もそれを正当化してくれる。永遠の水は味気ないと感じられ、高慢な本性に相応のシャンパンへと手が伸びる。間屋制家内工業の藝術への熱狂の渦のかたまりも、畢竟、流行現象だったのである。その上、厄介な事情も重なる。民藝の個々の分野も、民藝の本質の然らしめるところとして、地元らしいわずかな形態しか手持ちではないのである。家内手工業が、これらの乏しい諸形態にとどまっていると、買い手は早晩うんざりすることであろう。それに抗して異邦の形態を取り入れたりすると、自ら伝統を破ってしまう。都市の嗜好が民藝の様式化されたカーネーションや林檎の表現にもはや食指を伸ばさなくなれば、農民の家内手工業は異なった嗜好の意を迎えるほかなくなり、そこで、インターナショナルな藝術にモチーフをもとめざるを得なくなると、間屋制家内工業がもっていた民藝という幻影は潰え、瓦解する。せめて彼ら自身、つまり農民だけでも民藝から離れはしない、というのであれば！ しかし彼らが報われているのは、上流社会の藝術愛好と歩みを共にする感性のゆえである。彼らもまた水だけでよしとし続けるつもりはなく、シャンパンには手がとどかないものの、安酒<sup>フーズル</sup>なりとも、あやしげな行商人や場末の飲み屋のカモにされてしまう（原注）。

それゆえ、東ヨーロッパ諸地方の昔からの民藝が農民の間屋制家内工業という道をとって、少なくとも基本を生き続けさせていると見るのは幻影である。この民藝の諸形態の幾らか、あるいは多くをも間屋制家内工業に活用することはでき、そうした企画が藝術的にも経済的に多大の成功をおさめることを願っている。しかし民藝は、その微光と芳香のすべてをそなえたまま、すなわちその自給的なあり方、自給生産という高次元のあり方ではもはやあり得ない。それに、典型的な家内作業の諸形態にも流行の嗜好が、あたかも海が浜辺の砂粒を洗うように、ひたひたと押し寄せている。

（原注）この点で事情をうかがうのに役立つ観察を挙げると、ガリチア=ポジーリヤ（Galizisch-Podilien [訳者補記] ウクライナ南西・西部）の農民たちは贅沢品（キリム絨毯）を、同じ農民に、間屋制家内工業によってではなく、賃仕事として製作させている。農民向けの贅沢商品なら、間屋制家内工業を起こすのですら割に合うまい。まとまった数量を手がけるのは、偏に都市の大量需要のためである。

民藝の存在能力は、単純な経済的な生産形態、とりわけ家内作業に分ちがたく依存している。民藝を生命あらしめんとするなら、何にもまして家内作業を支えることが必要であろう。しかしそうした企てには、誰もまじめに着手しようとはしまい。今日なお族長制的な家族・生存関係と相対的ではあれ無欲望が家内作業を可能にしているわずかな地域ですら、高度の交通手段によってより高度の欲求が知られ、欲求を満たすことが渴望されるや、家内作業は衰滅にみまわれよう。ルーマニアの農婦に（先に筆者が事例に挙げた）高貴な質朴の感覚を永遠にもたせつづけようと欲するなら、ブコヴィナを支那の長城で囲みでもするしかないだろう。私たちが、歴史のたわごとのためにあり得ないと見えるようなことに手を出して、問屋制家内工業にさいしてそうした部族とそれに関係したことがらを人工的に保とうなどと欲したりすれば、それに答えるのにどんな根拠をもってすればよいであろう？　これが民の幸福と救いになるのだ、と嘯くことはできよう。しかしそれは信用してはもらえまい。実際、言っている者自身がその幸福を分けもつ決意をするのでもないかぎり、すなわち数千年をかけて獲得した文化構築を放棄するのでもないかぎり、また黄金時代であった族長制下の無欲望に立ちもどるのでもないかぎり、信用しない方に理があるであろう。私たちのあいだで、そうした方向へ踏みだすのは一步であれ、あり得ないことであろう。それは、熱狂的な民藝愛好家たちからさえ、（それが正しい正しくないかの判定を筆者はしたくないが）阿呆呼ばわりされることであろう。

しかし家内作業がもはや生きては続き得ないとすれば、同じことは当然ながら民藝にもあてはまる。家内作業が乗り越えられてしまった経済的階梯であること、これ自体、私たちにこの上なく関心事であるとともに、その普遍的な文化水準にはもはや立ち返りようがなく、そうであれば、民藝は人間の藝術製作の乗り越えられた階梯であることをも意味しよう。もっとも、その階梯は、（私たちが現にある）歴史的立場から見ると、魅力的で教説にあふれ、そこには、あらゆる真実の藝術を前にするのとおなじく喜びをおぼえることができる。しかし、民藝をめぐるは、それが私たち近代の藝術創造にとってもつ過剰なまでの価値づけが（最近までそれが付与されてきたように）おこなわれてきたことには何らの機縁もあり得ない。東ヨーロッパの民藝はその歴史的な義務と責任をすでに数世紀前に果たし終えた。今日それは、かりそめに何かを供するだけであるのは、流行とほとんど等しい。それゆえ私たちの義務はそこにはない。すなわち民藝がなお生き延びているわずかな諸所においてその命を人為的に永らえさせることにあるのではない。実際、民藝が見紛いようもなく死滅しつつある過程を前にした私たちには、避くべからざる義務が屹立する。それは民藝の生きてある活動の証人となる幸福に恵まれることがない後続の世代に対する義務でもある。その義務を果たすことは、今の今までなされないも同然であったが、それだけに義務をその重みと緊急性をも併せて果たすことが、これからの結論部になる。こう言うことによって、筆者はこの小冊子の公刊によって現実のものとする二番目の

目的を念頭においている。ちなみに、序文でも明示したように、筆者がオーストリア＝ハンガリー帝国における諸関係を優先的に取り上げるのは、それはそれで必然であった。またそれらのなかでも特にもう一度あつかうのは、オーストリア帝国の東の半分であるが、筆者には、職業と独自の視点と、それに特殊な研究を通じて、そこはすこぶる近しいのである。

民藝の意味については、一面では非常な過大評価がなされてきた。すなわち、私たち近代とこれからの藝術創造を新たな実りゆたかな軌道へと導いてくれる靈妙な力がそれに帰せられる。と共に他面では、民藝現象を文献的にも美術的にも確かめる営為を何もしてこなかったと言ってもよい。精々、ローカルな個別例をやたらに持ち上げる程度であった。しかし現代の業績として高い水準を持つ意味のある文献を探しても無駄である。美術史・文化史の他の諸分野におけるとてつもなく活発な活動とは対照的に、民藝に関係するものとなると怠慢であるのは、ほとんど説明がつかない。ただそれは、民藝を家内手工業の行程にすえることによってさらに永く生命を得させることができるとの錯覚にとらわれでもしない限り、ということでもある。民藝のおおきく延びている諸現象を固定するのは、少なくとも急務とは見えなかった。それへのケアは、ハンガリーやガリチアその他、衰微にみまわれている諸所に設立された家内手工業専門校がなっている。そうした営為にはすこぶる力がこもっているが、それは端的に観念的な心性の故である。言い換えれば、(それは口にするのははばかれるが) 私たちの時代のマニア性で、これについては先に (p. 112) で別の脈絡ながらとりあげた。今日、藝術の記念碑またいわゆる科学技術にかんする出版物は、実際的な目的と結合しなければならないと考えられている。またその目的とは、工業と輸出を経て金銭にいたる道をとって、最終的には国民の福利という明瞭な表現をとるべきものともされる。それゆえ筆者が思うに、民藝が広い圏で熱い注視を永く得ることがなく、そこまで達することが決してなかったのは、今日まで民藝が近代工業にとって値打ちのある肥料であるとは見られなかったがゆえであった。民藝だけを取り出すのは、満足には程遠く、時代の行き方には反するものと見られてきたのも、畢竟そこに発している。そこで、帝国の東部諸方において近代の〈問屋制家内工業〉の全体を創造的にとりあげ出版へと進むには、時宜と手段を快く見出せるような瞬間を待つことになったのだ。しかし事実かつ本もの問屋制家内工業には伝統的な民藝の救出と維持を期し得ないとする私見は、これまでに十分かつ詳細に示した。その事情を現在の時点で完全に明らかにすることは、至上命令的な義務と思えるが、それは所詮他人事とばかり手をこまねいては、民藝の最後の痕跡までが早晩跡形もなく消えうせ、忘却の淵にしみゆくからである。

それを防ぐために何よりも必要なのは、迫りくる喪失の量と値打ちの全体を計測することである。それをにらんで短く検討することはここでは何にもまして必然である。特にこ

れまでの筆者の叙述は民藝の意味を限定して、目的のためにその価値を引き下げ狭めていたように見えるだけに、なおさらそうであろう。しかしここで筆者に大事なものは、ただ一つ、民藝があると思われている場所に限って、民藝の価値をしぼり、そのために戦うことである。それは、民藝をめぐる宿命的な見方を除き去るためである。すなわち、外面的にすぎない一貫性と散漫な不注意によって、民藝の死滅を前に、民藝が跡形もなく消失する危険を招き寄せている宿命的な物の見方である。しかし民藝は伝承価値的な固有性を十分にそなえている。その最後の名残りをそれに突き入って情愛をもって研究することを正当なものとするためである。それらは、これまでがむしゅらに探索した岸辺の反対側にしか存在しない。

東ヨーロッパ諸民族の文化的過去の映像にとって、民藝の名残りは計り知れないほど大事なものである。すでに指摘したように、これら諸民族はこれまで、そもそも歴史を刻むことに乏しかった。普遍史のなかでは18世紀にまで、彼らの命運で一般の注目をもつめる記述には、ほんの数ページがあてられるにすぎなかった。これらの諸民族を最近まで導いていたのは、歴史をもたないスキタイ的なあり方であった。一日を追って次の一日が等しく続き、家内作業の狭い圏が、土地をたがやす夥しい数の人々の人生のほぼ全てである。ちなみに私たちはミュケーナイの出土品をもとに、ここでふれる民族の文化階梯、すなわちその生き方と物づくりをほぼ描くことできる。しかも、その民族のナショナルティを特定して挙げなくてもよい位置に立ってもきた。同じく、民藝のどんな断片的な名残も、往時のナイーヴな藝術製作の証左として、それ独特の言葉を語っている。これらの証拠を地域的なグループを目安にして集め、習熟した眼の鳥瞰に供するなら、そこではじめて、少なくとも個々の部族 (Volksstämme) について過去の正しい鏡を一点だけでも持つことになり、文字資料の欠落がある程度まで克服することもできよう。今日なお私たちは、私たちの往時の民藝の記念碑的物証を伝聞にたよらずとも実見することができ、またそれだけでなく、彼らが作る様をも調べ、そこでの民のたましい (Volksseele) の活動に耳を澄ますことできる。その点において、私たちはなお幸福な状態にあり、しかもそれは決して稀なことではない。

それゆえオーストリアの人間には自己自身への義務、すなわち帝国内の諸民族への義務がある。それは、諸民族のあいだになお存する民藝の名残りを考えられる限り綿密に、また能う限り学術的なシステムを以て収集し、それを包括的かつ体系的に出版して次の世代に送り継ぐことを以て果たすべき義務である。この数十年、オーストリアは異国で研究を行ない多大の成果を取ってきた。それ自体、オーストリアの政治的実力ならびにオーストリアの教養・学問と照らし合うものであり、偉大な国民・国家が実力を行使する上で生じる責務と考えられ、事実、帝国の境界の外においても、近代の文化諸民族の孜孜として輝かしき労働に関与している。しかしまた自己の域内の藝術財にも同じく注意深くあること

を促してもよいであろう。なるほど、それらは地表にあって輝きを放っているのではなく、数千年という歳月の保護土におおわれている。しかしその表土を見んか、財物は、一には地方村民が手をはたらかせて作っており、二には彼らの櫃や長持ちに残っている。そして日々使われるところから、堅牢な石壁や大理石の彫像にくらべて、使い減りと消滅に瀕している。オーストリア=ハンガリー帝国の地勢的・政治的位置からは当然のこととして、帝国がオリエントの入り口に立つ望楼に藝術的にも関係し、また南東ヨーロッパでは学問的なパイオニアという関係をももつことに注目するなら、帝国に属している者は、オリエントの諸問題の小さからぬ一部を自己の版図において解決すべきであろう。すなわち、数千年に及ぶオリエントとの関係をもつ地域において、<sup>オリエント</sup>東方からの光を受けとり、<sup>オリエント</sup>次いでそれを啓蒙として投げ返して東方の文化諸関係に関与するのである。

しかし単に自己自身に対してのみではない。私たちの域内の民藝を究極まできわめ品位ある整理へと進むことは、私たちオーストリア人が、全ての人類、そしてインターナショナルな学問に対して負う責務である。世界のいづこの土地も、オーストリア=ハンガリー帝国の版図のエスノロジー研究がもたらす豊かさにおいて適うところはない。エキゾチックな野生の人々のことは言うまい。たしかに彼らの文化は、その手技の所産のかたちで私たちの目前にあるのを見ても知られるように、絶対に満足のゆく明快をもって私たちが認識できるものではあり得ない。なぜなら、私たちは他の抛りどころを持ち合わせていないからである。すなわち、その民のたましい (Volksseele 民族霊) を深く見入り、そこに即してその藝術製作への私たちの省察をかさね、また修正をもほどこすほどではあり得ない。しかしこの点では、様態とまとまりにおいて、オーストリア=ハンガリー帝国ほど恵まれた関係のあるところは、ヨーロッパでも他にはあり得まい。

ヨーロッパの西と南に位置するロマンス諸語の諸地方でも、民藝はまったく死滅したわけではない。しかしその名残りは、はるかに厄介な連関のなかにある。ドイツのアルプス地方ですら、数世紀にわたるインターナショナルな影響による外皮が重層しているとは言え、そこにひそむ家内作業生産の核を、苦心すれば随所で剥いて取り出すことができよう。広くドイツ帝国のなかでも、ある種の上古的な諸現象への目配りが見てとれる。それに対して私たちの場合、さらに東の果てへと眼を転じれば、ロシアの地において一部でなおすこぶるプリミティヴな諸関係に逢着する。それらは、それ自体きわめて興味深いが、歴史的な検証には耐え得ない。そこでのインターナショナルな藝術との接触を明確にたどることには至らないからである。南東、バルカン半島では諸関係は幾重にも錯綜しており、私たちはそこで太古の文化の地とかかわることになる。それはこの地では、中世、また特にオスマン・トルコの支配の全期間を通じて、経済的ならびに藝術的本然に関してある種の後退造形が起きたからである。かくしてオーストリア=ハンガリーの地においてのみ、私たちは多様性と出逢うのであり、しかもそこにはヨーロッパの民藝の現存するほぼ



すべてが結集している。西と東はここで衝突し、その接触の影響は、藝術づくりの多数の固有性に自己を投影している。プリミティヴな家内作業と並んでその変形があり、賃仕事に接して外から導入された手仕事があり、遍歴の手職に接して問屋制家内工業が存する。装飾の諸形態も、ひろく装飾<sup>オルナメント</sup>の王国のすべて、すなわち永劫不変の幾何学的な線の組み合わせから人と動物の形象にまで延びている。北方の明るくも冷めた色調が、おぼろに温もりのある南の色彩と並んで現れる。爛漫と咲く多様性のなかから個々の現象を取り出し、各々についてエスノグラフィー・文化史・藝術史の位置を定めるには、深部まで覗いて何物をも見のがさない検診眼をはたらかせて、研いだ批判のカテーテルを差しこむだけでよい。オーストリアは、あまたの名品と現行品を供して国際的な学問の幅の拡大に貢献したが、それを見るにつけても免れ得ないのは、一度は我とわが屋敷を大掃除し、そこでの緊急かつ根本の問題を解決する義務である。しかもそれは、条件がなお存する間だけのことになる。

先の箇所、筆者は、民藝の諸現象、(あるいはもっと適切な言い方では) それらの収集とその最終的な記録を価値づけへと結ぶことを一般論のかたちで試みた。もっともそこで挙げた価値とは、いずれも愛好価値であった。となると、近代のコマーシャルリズムの意味において精神的価値をも存分に活用しようとする向きからすれば、ここで扱うことがらへの証言力としてはマイナスに映るであろう。それらが国民経済の諸形態、すなわち収入・販売その他の過程の入りこむのを善しとする人々である。実際、今日では、藝術的内容の出版物については、それらが工業を刺激し、見本とも模範ともなることがもとめられている。もちろん、域内にある民藝の名残りについて徹底した刊行は、民藝は近代の製作にも実り多い芽をふくんでいるとの前提の下に立つなら、工業にも裨益するであろう。しかし私見では、民藝を今すぐ学術的に収集し編集する必然性を正当化する上で、工業への有用性を叫ぶのはもはや少しも必要ではない。そうした企画は、任意の有用の見地をひっくりかえし、事実、我々が諸民族の過去への敬虔の記念碑ならびに国際的な学問への顕彰という以上ではないとき、私たち同時代人への道徳的な意義と教育的な価値を獲得するにすぎない。しかし民藝それ自体は、丹念に見るなら、かつてそうであったような養いの力ではない。その代わりに、民藝は、ずっと高度な序列の財物となってきた。宗教の感情にも似た計り知れないもの、国民性 (Nationalität) であり、人の心に場所を占め、その所有によって人は道徳的に毅然となり得るとされる。しかもその財物からは日ごとに何か崩れ落ちており、さらに西方文化の高波に洗われて跡形もなく消えつつある。そのためどんな名残りの貴重になる一方で、なお現存するものを湮滅させないことが真実の愛国的義務とみなされる。だからと言って、それへの追憶を堅固な作りの立派なモニュメントで恒久的なものとするというわけでもない。この点で、私たちの直接の先人たちは多くの過誤をおかしていたのだが、それだけに私たち自身は責務を免れ得ない。ちなみに

彼らに欠けていたのは、怠慢であることへの無自覚であった。逆に言えば、私たちには行動への義務が課せられているのである。

先にページを費やした考察は (p. 119-120)、民藝の名残りで現存するものの固定が、数か所においてすら、またある種の限界を伴いつつもなおまったく踏みだされなかったと解すべきではない。これまでの出版物の幾つかは、民藝にはじめて注意を促し、またその保存をはじめて説いた以上の意味を持つ。しかし民藝という非常に小さな分野のみをあつかいつつ大きな満足を得させてくれるモノグラフィーはこれまで書かれていず、まして包括的な取り組みはされてこなかった。ある地方では一書があるとか、ある地域では一文献が書かれているとか言ってすむことがらではない。必要なのは、家中を限なくさがし、労働にいそむ手をつみ、生産の経済的方法を研究し、製品に見てとれるあらゆるファクター、また原材料から完成した生産物まで、さらに仕様方法までを克明に記述することである。それには、学問的方法に習熟し藝術史について全般的な知識をそなえ、観察に価する何ものをも見のがさない人々がこれに従事することがもとめられる。それぞれの人が地方とその地方の人間に関する特殊知識を踏まえて研究をしているとしても、しかし全員が統一したプランにしたがって研究し、それによって等しく整理された（その都度すべての側面に沿った変形をも併せて）素材を集めること、さらにそれを基礎に最終的には見方を統合しつつ啓発できることがもとめられる。したがって、これまでのように個々それぞれが無計画・不統一かつ準備不足の力で以てするのではなく、統一した学問的な原則の下で、この研究分野の最良の代表者たちによってこの大きな課題の克服へと踏み出すのでなければならない。

またあらゆる場合に、生産のそのときどきの経済的な性格に注目することがもとめられる。一般的には当然ながらそれは家内作業であり、その現にある姿は、私たちがそこに民藝の所産を指摘することを裏づけてくれる。しかしそれにもかかわらず、そうした場合、そこに付随する調整にかかわる事情をも勘案しなければならない。一例だけを挙げれば、古代ギリシアでは商品は個々の事業家が正に工場的に生産されていた。しかしそれは、奴隷を含みながらも、まったく閉鎖的な家政のなかでのできごとであった。それゆえ私たちは、かかる生産を家内作業の概念の下にまとめることを余儀なくされる。他方、賃仕事は、多くの場合、芸術的な関係では民藝に沿った性格を保持してきており、その実際例は他ならぬオーストリア=ハンガリー帝国の東方諸地方において出逢うことができる。さらに、いわゆる特殊化された家内作業、すなわち今日多くは問屋制家内工業として現れ、しかし工房手職ではない種類をも考慮しなければならない。それはたとえば陶器作りで、特定の場所で手がけられ、その製品は広い範囲で購入・消費される。しかしそうした現象は、歴史的には工房手職でも問屋制家内工業でもなく、家内作業から必然的に生成した。なぜなら当該の生産品（今の事例では陶器）は原材料（陶土）が特定の土地に依存してい

るからである。個々の現象（産物）を判断するための諸関係が完全に明らかになっているのは極めて稀である。大多数は、民藝にあたるものを、追加されたものから注意深く考量しつつ分離することが必然となるであろう。この困難によってだけでも、厳密かつ方法論をもった学術的取り組みが要請されよう。なぜなら、それだけが恣意を回避できるからである。それまた錯誤をおかすことがあるとしても、同時に多くの場合、事後の修正の可能性に向けてひらかれた姿勢をとっているからである。かかる事情であれば、最大の困難は、アルプス諸地方の民藝の把握、同じくベーメンのそれであるかもしれない。

これらのわずかな示唆だけでも十分であろう。私たちに課せられているのは広い射程の作業であること、それをなし終えるには夥しい力が運動にまでならなければならないことを指摘したのである。しかしこれを、この上なく精選された学問的原則の下、現代最高の再現技術を駆使して出版することに成功すれば、それは記念碑を打ち立てることになる。帝国の名声を不朽のものとする記念碑、帝国の諸民族にそれぞれの藝術の過去をいついつまでも回顧させることになる記念碑。かくモニュメント性の高い企画であるだけに、下からではなく、鳥瞰に適した高次の中心点からの着手が欠かせない。とすれば、この警鐘が向かう先は、何にもましてオーストリア教育行政府である。現行の創造を喜び開明的でもあるその代表者の方々に、力強く実り多きイニシアティブを期待したい。この事業への推進者は欠けてはいないこと、それは崇高な目標が証かしている。それに参画する諸民族の愛国心もまたその証しである。

#### [解題]

本稿は、アーロイス・リーグルの民藝に関する論考（1894年刊）の全訳である。先ず書誌データを挙げる。

Alois Riegl, *Volkskunst, Hausfleiß und Hausindustrie*. Berlin [G. Siemens] 1894, Repr. Nachdruck: Mittenwald [Mäander Kunstverlag] 1978.

リーグル（Alois Riegl 1858–1905）はオーストリアのリンツに生まれ、ウィーンに没した美術史家で、ウィーン大学教授として現代に至る美術史研究の基礎を築いた学究である。その経歴はすでに本邦でも美術史の関係者によって紹介されており、また主要著作はほとんど邦訳がなされている。それゆえここで解説は行わず、民藝論に関する簡単な説明にとどめる。

„Volkskunst“を〈民藝〉と訳すことには違和感も予想されるが、各国比較を射程において用語を揃える意味で、この語を当てた。1894年に中篇の一書として刊行されたこの論考は、リーグルの書きもののなかではめずらしく邦訳をもたないようである。それには美

術史研究としてはやや特異な中身であることと、その論旨が現在も首肯に値するかどうか疑問であるためと思われる。しかしドイツ・オーストリアにおける〈民藝〉(Volkskunst)との理論的な取り組みはここから始まったと言ってもよいのである。その論旨を肯定する人はいないが、学説史の起点としての意義は減じない。また解きほぐしてみると、決して無視し得ないことも分かってくる。それはリーグルのこの論考を正確に読むために背景の事情を探る試みがなされてきたことからもうかがえる。筆者が最近訳したベルンヴァルト・デネケの「民藝の発見と藝術産業」(Bernward Deneke, *Die Entdeckung der Volkskunst für das Kunstgewerbe*. 1964.) もその一つであり、他にごく近年でも研究文献が幾つか現れている。

ところで筆者がリーグルに注目したのは、ドイツ民俗学のなかでの民藝研究を日本に紹介し、それを踏まえて〈民藝〉概念を再検討するためである。その意図に向けて学史を追っているが、自説を述べると共に、里程標となる学説を共有することをも計画している。ドイツ・オーストリアの民藝理論の流れであるが、それは二つの焦点をもつ楕円として紹介することになる。焦点の一つはリーグルの民藝論で、周辺事情をも組みこみながら解説を試みる。楕円のもう一つの焦点はベルリン大学の民俗学の教授であったアドルフ・シュパーマー(1883-1953)の民藝理論で、中心は「民藝と民俗学」(Adolf Spamer, *Volkskunst und Volkskunde*. 1928年)という論考である。両者はまったく異なった、正反対と言ってよい視点に立っているが、論調の強烈であることでは、その後現れた他の論者たちの比ではない。もとよりどちらも今となっては古典的な存在であるが、現代の論者たちはそこまで強い主張には行き切らないようである。また現代では(と言っても、これまた比較的近い過去の里程標であろうが)、マールブルク大学のヨーロッパ・エスノロジー(民俗学)の教授マルティーン・シャルフェ(1936年生)の「民藝のメタモルフォーゼ」(Martin Scharfe, *Die Volkskunst und ihre Metamorphose*. 1974)あたりが事情をうかがうのに便宜と思われる。これらを紹介しつつ、そこに本邦で行なわれている〈民藝〉概念の議論を重ねながら問題を解きほぐしたいと考えている。

なお本稿では幾つかのキーワードのうち „Hausindustrie“ を〈問屋制家内工業〉と訳した。それは、もう一つのキーワードで〈家内作業〉と訳した „Hausfleiß“ が同時に頻出するために〈家内工業〉だけでは一字違いでは紛らわしいのと、問屋制を冠してもほとんどの箇所ではその方が意味の通りがよいからである。また、そうした経済学史用語の典拠を含めて訳稿には注解をほどこさなかったが、そうした解説は、同時に進めている別稿において補いたい。

Jan. 2014 S. K.